

# 主要人物との身体接触場面における感情傾向と内的ワーキング・モデルとの関連

学校教育専攻

幼年教育コース

酒井 由紀

## 問題と目的

近年では、人間の発達における身体接触の潜在的な有効性が認められ、各学問領域において、さまざまな方法により研究され始めている。ところが、身体接触が人間行動の発達に及ぼす影響をトータルに解明しようとした研究は多くなく、わが国では、幼少期からの養育者との身体接触頻度に対する認識量を取りあげて検討しているにすぎない。しかし、身体接触場面において問題にされるべき点は、接触の量より質であると考えられる。

そこで本研究では、接触の質を測る1つの変数として、身体接触場面で生まれる感情を取りあげ、検討を進めていくこととする。

## 調査1

### 目的

Touching Emotion Scale (TES) を作成し、幼少期および現在の母親との身体接触場面での感情傾向の関連を探る。また、現在の母親との身体接触場面で抱く感情傾向と、対人関係において影響を与えるとされている内的ワーキング・モデルとの関連を検討する。

### 方法

大学生 140 名に質問紙調査を行い、そのうち幼少期の主な養育者を母親としていた女子 83 名を分析対象とした。なお、男子はデータ数が少なかったため、女子のみを取り扱うこととする。

### 結果と考察

TES を因子分析した結果、母親との身体接触

から快を得られる〈接触快〉因子、不快を感じる〈接触不快〉因子、身体的ふれあいを求める一方で不安を感じる〈接触葛藤〉因子の3因子からなる構造であることがわかった。

幼少期と現在の母親との身体接触場面で抱く感情傾向の関連については、両時期の感情にかなり強い結びつきのあることが示された。また、身体接触への不快感情が強い者の中には、接触行動自体に強い不快を感じている者の他に、身体接触への不快感情の根底で「さわりたいけれど不安だ」といった葛藤が見え隠れしている者が存在すること、そして、身体接触への葛藤感情が強い者の中には、接触行動自体に強い葛藤を感じている者の他に、身体接触への葛藤が強いがために接触行動を不快に感じるという者が存在することが示唆された。身体接触に対する感情は、行動レベルで察せられる以上に複雑な構造であることを理解する必要があるだろう。

次に、現在の母親との身体接触時の感情傾向と内的ワーキング・モデルを調べたところ、弱い関連ではあるが、回避傾向の高い愛着を示す者は母親との身体接触を不快、あるいは葛藤を感じるものとして受け止める傾向のあることが示された。また、安定傾向の高い愛着を示す者にとっては、身体接触での葛藤が少ない傾向が見られた。Strange Situation Procedure (SSP) において測られる乳児の行動は、現象的には接近または回避に過ぎないが、本調査の感情傾向3因子が乳児に当てはまるならば、乳児も複雑な感情構造をなしていると考えらるべきであろう。

## 調査2

### 目的

幼少期の母親との身体接触場面での感情傾向と恋人との身体接触場面での感情傾向の関連を探る。また、恋人との身体接触場面で抱く感情と内的ワーキング・モデルとの関連を検討する。

### 方法

大学生 476 名に質問紙調査を行い、そのうち幼少期の養育者を母親としていた男子 153 名、女子 155 名を分析対象とした。

### 結果と考察

幼少期の母親に対する TES を因子分析し、調査 1 での結果と同じ 3 因子 (<接触不快> 因子、<接触快> 因子、<接触葛藤> 因子) を男女ともに抽出した。一方、恋人については、恋人との身体接触から快を得られる <接触快> 因子、不快を感じる <接触不快> 因子、不安を抱いている <接触不安> 因子の 3 つを男女ともに抽出した。母親への <接触葛藤> 因子に含まれていた「私は、A さんがしてくれていた以上に体のふれあいを求めている」という項目が、恋人への接触感情傾向の因子分析の結果で <接触快> 因子へ移動していたことは、恋人への身体接触に対する要求が快感情と結びついているのに対して、母親への身体接触に対する要求は、快感情とは別の次元で生まれていることを示唆しているといえよう。これより、子どもにとって母親との身体接触は、快が得られる得られないに関わりなく、本能的に寄り添ってほしいという感情を呼び起こすものであり、一方、恋人との身体接触は、快が得られるからこそ接触をさらに求めていくのだと解釈することができよう。

幼少期の母親との身体接触場面での感情傾向と恋人との身体接触場面での感情傾向の関連については、接触対象や時期の違いを越えて、それらの感情には結びつきのあることが示された。男子は、不快感情において特にその結びつきが

強く、幼少期の母親との身体接触場面で葛藤感情が強ければ強いほど、恋人との身体接触を不快、または不安と感じる傾向が弱いながらも見られたことから推論するならば、幼少期に母親という 1 人の女性との間で経験した身体接触を、青年期に、恋人という別の女性に対して重ね合わせてしまうためではないかと考えられる。

次に、恋人への接触感情と内的ワーキング・モデルとの関係においては、回避傾向の高い愛着を示す者ほど恋人との身体接触を不快だと感じる傾向が、またアンビバレント傾向の高い愛着を示す者ほど恋人に対する身体接触に不安を感じる傾向が、それぞれ男子において特に見られた。これについては、セックスレス・カップルの中で特に問題だとされている「性的回避群—回避型人格障害」との関連が疑われる。しかし、現段階において母子間での身体接触経験と回避型人格障害との直接的な因果関係は確認されておらず、また、本調査において、回避傾向の高い愛着を示す人ほど恋人との身体接触を不快だと感じる傾向が見られたといえども、内的ワーキング・モデルの回避傾向と回避型人格障害との関連について言及した先行研究が見あたらないため、今後この点については、臨床研究側からのアプローチが望まれる。

### 総合考察

本研究より、内的ワーキング・モデルが、主要人物との身体接触という一行動場面においても、感情面で部分的に影響を与えていることがわかった。両調査で共通に見られた結果は、身体接触への不快感情と内的ワーキング・モデルの回避傾向との関連であり、その背景に、不安定な愛着スタイルをとる回避傾向の高い者が、他者と親密になることを回避している様子が想像された。

主任指導教官 浅川 潔司  
指導教官 横川 和章

2001年度 学位論文

主要人物との身体接触場面における感情傾向と内的ワーキング・モデルとの関連

兵庫教育大学大学院修士課程

学校教育専攻幼年教育コース

酒井 由紀

M00068B

## 問題と目的

多くの人間にとって生後数年間は、抱っこやおんぶ、あるいは頭をなでられたり手をつながれたりといった身体接触が、養育者および他者により、もっとも多く行われる時期である。その後、身体の性的成熟や文化的背景が影響し、親子間あるいは他者との身体接触は次第にあまり見られなくなっていく。かわりに、人々は恋人とめぐりあえたとき、性行為を含め、さまざまな形で相手との身体接触を求め始める。たとえば、この上なく寂しいときや辛いとき、ある人にとっては言葉の慰めより体のぬくもりが求められるのはなぜか。または、相手の体温が皮膚から感じられるにも関わらず、心が冷えきっている瞬間がある、と感じている人がいるのはなぜなのか。このように対人関係上での身体接触は、行動レベルで見ると、さわる、さわらないといった単純なものに過ぎないが、感情レベルにおいてはより複雑であるように思われる。しかし、非言語行動の中でも身体接触の研究は、現時点において遅れをとっていると言わざるを得ない。

たとえばHarlow(1958)の有名な赤毛ザルの実験で知られるとおり、本来未成熟体にとって身体接触は、生死に影響を与えうる食物と同等以上に必要とされている。この実験において子ザルたちは、乳の出る針金製の母親よりも乳の出ない布製の母親のそばに長くいることを好んだ。これは愛情反応の発達において、接触の快感が重要な要素であり、乳を飲む行動自体はそれに比べると重要でないことを実証したものと見える。つまり、愛着(attachment)の起源となるのは生理的欲求の充足ではなく、接触の快感そのものではないかという考えに至ったのである(繁多,1987)。しかし、当時この研究によって注目されたのは、「子どもはミルクをもらうことで母親への愛着を抱く」という二次的動因説を否定した点であり、上記の接触快感説ではなかった。

愛着とはBowlby(1969, 1973, 1980)が提唱した概念であり、人間もしくは動物が、他の特定の対象に対して形成する情愛的な絆のことである。

Bowlbyは、乳児の愛着行動が活性化される時、そこには身体接触への強い要求が見られることを指摘した。この愛着理論の確立に大きく貢献したAinsworth(1981)も、進化論的視点から、身体接触が愛着形成にとってもっとも重要だとしている。しかし、その当時多くの研究者が、人間関係の確立にとって重要なのは、視覚や聴覚などの遠距離受容器を媒介とした相互作用であるとしたため、密接な身体接触による相互作用が無視される傾向にあった。

その一方でMontagu(1971)は、対人関係における皮膚接触経験が、その後のその人の行動発達にどのような影響を及ぼすかについて、生理学、心理学、人類学、動物行動学のデータをもとに次のような考察をしている。Montaguは、皮膚接触要求が生体にとって生存し続けるための基本的要求であるとし、幼児は非常に強くそれを持っていると述べた。そして、人はそれが満たされなかった場合、要求を残しながら皮膚接触場面では多かれ少なかれぎこちなく行動し、身体的、心理的、行動的にも不器用な人間に成長する、と言及した。またMorris (1971)は、人間の親密な出会いには言語的・視覚的要素だけでなく嗅覚的要素さえ含むとされているものの、結局のところ愛するとはさわることを意味する、と指摘している。さらにKnapp(1972)は、人と人との間で行われる情報伝達の中で接触が最も基本的な形態、つまり最も原始的な形態であることを指摘し、人間関係において相手を勇気づけたり、優しさを表現したり、精神的支えとなったりする際に、身体接触が重要な一面を担っていることを述べた。

近年では、人間の発達における身体接触の潜在的な有効性が認められるようになり、発達心理臨床の領域でも注目されてきている(Grandin, 1992 ; Holroyd and Brodsky, 1980 ; Tronick, 1995 ; 今野, 1999など)。また、タッチによる精神・神経機能への影響や効果を調べるための、脳・生理学的方法を用いた実証的研究(森下・池田・長尾, 2000 ; 森・村松・永澤・福澤, 2000など)や看護場面でのタッチに関する意識調査(畠中・土蔵, 1998)など、各領域において、さまざまな研究方法により身体接触が見直され始

めている。

多くの人間にとって身体接触は、その有効性の有無に関わらず無意識的になされてきた。ところが今日、一部の人たちにおいてはそれが違和感を感じる行動となりつつあるように思われる。たとえば現代日本社会特有の病理と考えられているセックスレス・カップル(阿部, 1998; 石崎, 2000)や、育児において子どもをさわらない、あるいはさわれない母親(林, 1999; デラシュー・永島, 2001)、または介護場面で親との身体接触を嫌悪する子どもなど、一般的に本人にとって主要と思われる人物との接触に対し、不安や嫌悪感を抱く人たちの存在が明らかになってきた。

ところが武藤(1988)も指摘するように、身体接触に焦点を当て、人間行動の発達に及ぼす影響をトータルに解明しようとした研究は多くない。わが国では山口・春木(1998)が、他者からの身体接触が気分はどう影響するかについて、大学生を対象に気分評定尺度を用いて実験を行った。その際、幼児期から現在に至るまでの時期を6つの段階に区分し、回想法により各々の時期において両親から受けてきた身体接触の頻度を「全くさわられなかった」から「非常によくさわられた」までの10段階で求めたところ、実験中に他者からさわられることを否定的に捉える者ほど、幼児期に母親から受けた身体接触が少ないと想起することがわかった。また竹内・鈴木(2000)は、親への親密感、尊敬、共感といった親に対するイメージと、同じく回想法による身体接触の頻度に対する認識および親から受けた養育経験について、大学生を対象に質問紙で調査したところ、幼少期に親からよくさわられたと答えた被験者は、親を養護的と認識し、「親のようになりたい」「親と気持ちを通じ合っている」など心理的同一化をしている傾向が見られた。一方、山口・山本・春木(2000)は、大学生および心療内科に通う青年期の患者を対象に、先と同じく回想法で両親からの身体接触の頻度を6つの時期において求め、現在の心理的不適応との関連について調査した。その結果、男性は心理的不適応と両親からの身体接触の頻度に対する認識との間に関連はみられなかったが、女性では心理的不適応の高い者

ほど両親からの身体接触の頻度を低く評価することがわかった。

しかし、母子間の縦断的愛着研究を行ったAinsworth(1981)が、「身体的接触が愛着の発達過程に影響を与えるのは、いかに頻繁に母親が乳児と身体的接触をするかではなく、どのように乳児と身体的接触をするかである(p.15)」ことを指摘したように、身体接触場面において問題にされるべき点は、その量の多さより質の良さであると考えられる。山口ら(2000)も指摘するように、身体接触という言葉が表す内容には、肯定的な触れ方以外に「叩く」「蹴る」などといった否定的な触れ方もあり得るため、接触の頻度だけを取り上げることには問題がある。また、たとえば親子間の身体接触場面では、養育者の自己満足によって接触の質の良し悪しが判断されるべきではなく、その行為を受けた子どもが養育者との接触を安心、快であるものとして受け入れたとき、初めて二者間に効果的な相互作用が生まれると考えるべきである。しかしながら、このような主要人物との身体接触に伴う感情面を扱った実証的研究は、今までなされてこなかった。

そこで本研究では、身体接触場面における感情に焦点を当てて検討を進めていくこととする。そのために、まず調査1では、身体接触場面における感情傾向を測定するTouching Emotion Scale (以下、TESと略す)の作成から始める。この尺度では、身体接触場面において相手からどれくらい、どのようにさわられたのか、あるいは被験者自身が行ってきた身体接触の具体的な行動などは問題としない。設定された人物に対し、それまでに経験してきたその人物との身体接触をどのように感じていたのか、という視点から質問項目が構成されている。なお、できあがったTESによって大学生を対象に、回想法で幼少期および現在の養育者との身体接触場面における感情傾向を測定し、その構造を探るとともに、現在の養育者との身体接触に対する感情傾向と一般的な対人関係における感情傾向との関連を検討する。続いて調査2では、調査1で使用したTESに若干の修正を行い、より信頼性や妥当性を高めた後に、それを用いて幼少期の養育者および恋人との身体接触場面における感情傾向について尋ねる。被験者が想起した幼

少期における養育者との身体接触場面での感情傾向と、恋人との身体接触場面での感情傾向には、何か関連があるのか。また、恋人との身体接触場面で抱く感情と、一般的な対人関係において抱く感情に関連はないのだろうか。以上の2点について調べることを調査2の目的とする。

なお本研究において、一般的な対人関係における感情傾向を捉える際には、Bowlby(1969, 1973, 1980)によって概念化された内的ワーキング・モデル(internal working model)の尺度を利用した。内的ワーキング・モデルとは、愛着対象との具体的な経験を通して人の内部に形成される、愛着対象および自己に関する心的表象のことである。たとえば、愛着対象は誰で、どこに存在し、またどのような応答を期待できるのか、あるいは自分自身が愛着対象にどのように受容され、または受容されていないのか、ということについて各個人が抱く主観的な考えを指す。Bowlby (1973)によれば、人々にとって内的ワーキング・モデル形成のもっとも敏感な時期は、生後6ヶ月から5歳くらいまでの間であり、人はその後このモデルを基礎にして、あらゆる出来事を知覚し、未来を予測し、自分の計画を作成するとしている。

もともと愛着研究は、実験室内での乳児の行動観察により行われていたが、この内的ワーキング・モデルという概念が注目されるに従って研究の対象年齢が拡がり、成人における愛着についても表象や言語レベルから検討されるようになった。その中でHazan and Shaver (1987)は、現在持つ一般的な対人関係に関する考え方の分類 (安定 (secure) 型・アンビバレント (ambivalent) 型・回避 (avoidant) 型) と恋愛関係の持ち方が一致する傾向にあることを報告した。わが国では、託摩・戸田(1988)がHazan and Shaverの研究をもとに、個人がもつ対人関係の枠組み、および自己や他者のあり方などといった内的ワーキング・モデルを測定する日本語版の質問紙尺度を作成した。本研究では、この託摩・戸田の尺度に追加や修正を行って再作成された戸田(1988)の尺度を使用し、現在の内的ワーキング・モデルを測定することによって、一般的な対人関係における



感情傾向を見る。

なお、この戸田(1988)の尺度を使う際には注意すべき点がある。Bowlbyは愛着の発達において、幼少期に作られた内的ワーキング・モデルがその後一貫した働きをするため、早期経験と現在の状況の両者が不可分に結びついている、と考えていた。しかし、後に多くの研究が積み重ねられるにつれ、養育者以外の新しい愛着対象の出現により、それまで持っていた内的ワーキング・モデルが大きく変更する可能性があることがわかり、今日Bowlbyのその定義は揺らぎ始めている。この戸田の尺度についても、そこで測られる内的ワーキング・モデルとは各個人が現在もっている愛着スタイルのことであり、遠藤(1992)が指摘するように、必ずしも過去の両親との関係などといったものが含まれているわけではない。また、乳幼児の内的ワーキング・モデルは行動レベルで、成人の内的ワーキング・モデルは言語もしくは表象レベルで測定されたものであって、結果が似ているからといって単純に両者を同質のものを見なすわけにはいかない(戸田, 1991)。本研究においても、戸田の尺度を用いる際はその点に留意し、あくまで今現在もっている内的ワーキング・モデルの測定を目的として、それを取り扱っていくこととする。

## 調査 1

### 目的

Touching Emotion Scale を作成し、幼少期および現在の養育者との身体接触場面における感情傾向の関連を探る。また、現在の養育者との身体接触場面で抱く感情と内的ワーキング・モデルとの関連を検討する。

### 方法

#### (1) 本調査の対象

兵庫県下の国立大学に通う大学生140名（男子42名、女子98名）を対象にした。そのうち、有効回答数は男子35、女子84であった。なお、男子のデータ数が少ないため、女子のみを分析の対象とした。回答に欠損値のなかった84名のうち、幼少期の養育者に母親を選んでいた83名を分析対象として取り扱っていく。対象者の年齢は18歳から21歳で、平均18.9歳であった。

#### (2) 本調査の手続

Touching Emotion Scale (TES) の項目をつくるため、青年期の男女5人に対して個別面談（1人約10分）を行い、他者との身体接触場面における感情について自由な意見、および経験談を求めた。その後、面談において得られた言葉を参考にしつつ、より多面的に身体接触時の感情を表現するよう努め、合計20項目からなるTESを作成した。講義時間の一部を利用して、TESを含む以下の各尺度により構成された質問紙を配布し、集団で実施した（2000年7月上旬）。

### (3) 測定内容

#### 1, フェイスシート

性別、学年、年齢のほか、現在の居住形態について一人暮らし、親元暮らし、その他の中から回答を求めた。

#### 2, 幼少期における養育者との身体接触場面での感情傾向

幼少期における養育者との身体接触場面での感情を測定するため、TES (20項目) の項目上の人物を「生まれてから中学校に上がるまでの間で、体にさわる回数をもっとも多かった養育者」と設定し、各項目に対して「全くあてはまらない」(1点) から「非常にあてはまる」(6点) までの6段階評定で回答を求めた。

#### 3, 養育者との身体接触に対する頻度の認識

養育者からどの程度体をさわって育てられたと認識しているかについて、「よくさわられた」から「全然さわられなかった」までの4段階評定に「思い出せない」を入れて、5つの中から回答を求めた。

#### 4, 養育者との身体接触に対する満足感

これまでに養育者との間で行ってきた身体接触を、現在どのように感じているかについて、「とても満足している」「まあまあ満足している」「もう少しさわってほしかった」「もっとさわってほしかった」「さわられなくなかった」「何も思わない」の6つの中から回答を求めた。

#### 5, 現在における養育者との身体接触場面での感情傾向

現在における養育者との身体接触場面での感情を測定するために、TES (20項目) の項目上の人物を、上記1の「過去における養育者」で設定した人物と同一にした上で、各項目に対して「全くあてはまらない」(1点) から「非常にあてはまる」(6点) までの6段階評定により回答を求めた。なお、各項目の文末表現は、過去形から現在形へ変換した。また、たとえば項目12の「体をさする(幼少期用)」という表現を「マッサージをする(現在用)」に変更するなど、項目の内容が変わらない程度で部分的に修正することにより、被験者が場面を想定しやすいよう配慮した。

## 6, 内的ワーキング・モデル

一般的な対人関係における感情傾向を測定するため、戸田（1988）により構成された内的ワーキング・モデル尺度（18項目）を用い、各項目に対して「全くあてはまらない」（1点）から「非常にあてはまる」（6点）までの6段階評定によって回答を求めた。なお、尺度の併存的妥当性、構成概念妥当性は詫摩・戸田（1988）、戸田（1988）で確認されている。

## 結果

### 1, 幼少期の母親との身体接触場面における感情傾向の因子分析

TESの各項目の平均値と分散を求めた結果、項目14、15、18については、幼少期および現在に対する回答ともに偏りが見られたため、分析から除外した。

幼少期における母親との身体接触場面での感情に関する17項目を、主因子法・Promax回転により因子分析し、固有値と解釈可能性を考慮して3因子を抽出した（表1）。

第Ⅰ因子は、「10 私は、Aさんの体にさわることを心地よく感じていた」、「20 私は、Aさんからさわられることに心地よさを感じていた」、「1 私は、不安で仕方なかった時、Aさんにふれることで安心感を得られていたと思う」などの項目が高く負荷しており、身体接触に対する肯定的な感情を読み取ることができる。したがって、これらの項目を<接触快>因子と命名した。第Ⅱ因子は、「19 Aさんから一方的にふれられると、不安を感じていた」、「16 たとえAさんでも、私は自分の体にさわられると嫌悪感を抱いていた」、「11 私は、Aさんがあまりに私の体にさわってくるのでいやだった」などの項目が高く負荷しており、身体接触に対する否定的な感情を読み取ることができる。したがって、これらの項目を<接触不快>因子と命

表1 幼少期の母親との身体接触場面における感情傾向の因子分析結果

項目内容	因子1	因子2	因子3
10 私は、Aさんの体にさわれることを心地よく感じていた	.866	.206	.039
20 私は、Aさんからさわられることに心地よさを感じていた	.828	-.027	.099
1 私は、不安で仕方なかった時、Aさんにふれることで安心感を得られていたと思う	.821	.025	.072
12 私は、Aさんが私の体をさすってくれればリラックスできたと思う	.775	-.052	.043
4 私は、Aさんとふれあっている時うれしかった	.766	-.113	.052
17 不安で仕方ない時、Aさんが背中を手を置いてくれれば安心したと思う	.666	-.141	.010
13 私にとって、Aさんからのスキンシップはいやなものではなかった	.633	-.213	-.134
5 私は、Aさんと距離を置いてふれあわずにいる方が心地よかった	-.441	.382	.022
19 Aさんから一方的にふれられると、不安を感じていた	.173	.817	-.011
16 たとえAさんでも、私は自分の体にさわられると嫌悪感を抱いていた	-.049	.790	-.094
11 私は、Aさんがあまりに私の体にさわってくるのでいやだった	-.134	.632	-.021
7 私は、Aさんの体にさわりたいくなかった	-.148	.428	.338
3 私は、AさんにさわることによってAさんの感情を損わせてしまうのではないかと、という不安を感じていた	.181	-.057	.818
9 私は、Aさんが私にさわられることを望んでいないのではないかと感じていた	.079	.165	.733
2 Aさんの体にさわれることは、私にとってたやすいことだった	.500	.235	-.601
8 私は、Aさんがしてくれていた以上に体のふれあいを求めていた	.239	.032	.579
6 私は、Aさんが怒っていても、Aさんの体をさわることには不安はなかった	.230	.092	-.238
累積寄与率 (%)	55.078		

□で囲ったもの .400以上

名した。第Ⅲ因子は、「3 わたしは、AさんにさわることによってAさんの感情を損わせてしまうのではないかと、という不安を感じていた」、「9 私は、Aさんが私にさわられることを望んでいないのではないかと感じていた」、「8 私は、Aさんがしてくれていた以上に体のふれあいを求めていた」などの項目が高く負荷しており、身体接触に対するアンビバレントな感情を読み取ることができる。したがって、これらの項目を<接触葛藤>因子と命名した。

## 2. 現在の母親との身体接触場面における感情傾向の因子分析

現在における母親との身体接触場面での感情に関する17項目を、主因子法・Promax回転により因子分析し、固有値と解釈可能性を考慮して3因子を抽出した(表2)。

表2 現在の母親との身体接触場面における感情傾向の因子分析結果

項目内容	因子1	因子2	因子3
17 不安で仕方ない時、Aさんが私の背中に手を置いてくれると安心できると思う	.938	.280	-.093
13 私にとって、Aさんからのスキンシップはいやなものではない	.816	.123	-.201
12 もしAさんが私の体をマッサージしてくれるならば、その時私はリラックスできると思う	.753	.250	-.205
1 不安で仕方ない時、Aさんにふれることで安心感を得られると思う	.598	-.270	.136
20 私は、Aさんからさわられることに心地よさを感じることができる	.584	-.302	.197
10 私は、Aさんの体にさわられることを心地よく感じる	.581	-.249	.383
4 私は、Aさんとふれあっている時、喜びを感じることができる	.555	-.299	.177
16 たとえAさんであっても、私は自分の体にさわられると嫌悪感を抱く	.112	.848	.082
5 私は、Aさんとの間に距離を置いてふれあわずにいる方が心地よい	-.032	.777	.060
19 私はAさんから一方的にふれられると、不安を感じると思う	.104	.622	.373
11 私は、Aさんがあまりに私の体にさわってくるのでいやになる	.150	.618	-.078
7 私は、Aさんの体にさわりたくない	-.188	.600	.236
9 私は、Aさんが私にさわられることを望んでいないのではないかと感じる	-.116	.134	.756
3 私は、AさんにさわることによってAさんの感情を損わせてしまうのではないかと、という不安を感じる	-.133	.063	.706
8 私は心の中で、Aさんとの今以上の身体的ふれあいを求めている	.063	-.129	.702
2 Aさんの体にさわられることは、私にとってたやすいことである	.387	-.285	-.234
6 私は、Aさんが怒っていても、Aさんの体をさわることには不安はない	-.062	-.075	-.071
累積寄与率 (%)		54.599	

□で囲ったもの .400以上

因子構造は、幼少期の母親との関係について求めた上記1での結果と共通していた。第I因子は、「17 不安で仕方ない時、Aさんが私の背中に手を置いてくれると安心できると思う」、「13 私にとって、Aさんからのスキンシップはいやなものではない」、「12 もしAさんが私の体をマッサージしてくれるならば、その時私はリラックスできると思う」などの項目が高く負荷しており、幼少期の母親との身体接触場面を想定した際の第I因子とほぼ対応していた。したがって、先と同様に＜接触快＞因子と命名した。第II因子は、「16 たとえAさんであっても、私は自分の体にさわられると嫌悪感を抱く」、「5 私は、Aさんとの間に距離を置いてふれあわずにいる方が心地よい」、「19 私はAさんから一方的にふれられると、不安を感じると思う」などの項目が高く負荷しており、この因子についても、幼少期の

母親との身体接触場面を想定した際の第Ⅱ因子とほぼ対応していた。したがって、〈接触不快〉因子と命名した。第Ⅲ因子は、「9 私は、Aさんが私にさわられることを望んでいないのではないかと感じる」、「3 私は、AさんにさわることによってAさんの感情を損わせてしまうのではないかと、という不安を感じる」、「8 私は心の中で、Aさんとの今以上の身体的ふれあいを求めている」などの項目が高く負荷し、この因子についても、幼少期の母親との身体接触場面を想定した際の第Ⅲ因子とほぼ対応していた。したがって、〈接触葛藤〉因子と命名した。

### 3. 幼少期および現在の母親との身体接触場面での感情についての各3因子の信頼性係数と因子相関

第Ⅰ因子において因子負荷量が.400以上であった幼少期の8項目および現在の7項目のうち、共通していた項目1, 4, 10, 12, 13, 17, 20の合計を〈接触快〉得点とした。同様に、第Ⅱ因子についても、幼少期および現在において共通していた項目7, 11, 16, 19の合計を〈接触不快〉得点とした。第Ⅲ因子についても、各々に共通していた項目3, 8, 9の合計得点を〈接触葛藤〉得点とした。

なお、各因子ごとにCronbachの $\alpha$ 係数を求めたところ、〈接触快〉因子では幼少期が.914、現在が.884、〈接触不快〉因子では.774と.789、〈接触葛藤〉因子では.781と.774となっており、内的整合性は高いと考えられる。

また、幼少期において〈接触快〉因子と〈接触不快〉因子の間には比較的強い負の相関( $r=-.496$ )が、〈接触不快〉因子と〈接触葛藤〉因子の間には中程度の正の相関( $r=.315$ )が見られた。現在においては〈接触快〉因子と〈接触不快〉因子の間に強い負の相関( $r=-.712$ )が、〈接触不快〉因子と〈接触葛藤〉因子の間には弱い正の相関( $r=.293$ )が見られた。

### 4. 対人関係における感情傾向の因子分析

内的ワーキング・モデルに関する18項目を、主因子法・Varimax回転により因子分析し、固有値と解釈可能性を考慮して3因子を抽出した(表3)。

表3 対人関係における感情傾向の因子分析結果

項目内容	因子1	因子2	因子3
5 私はすぐに人と親しくなる方だ	.869	-.012	-.078
1 私は知り合いができやすい方だ	.833	-.124	-.085
18 初めて会った人とでもうまくやっつけける自信がある	.703	-.122	-.043
7 私は人に好かれやすい性質だと思う	.682	-.412	.011
10 たいいてい人は私のことを好いてくれていると思う	.614	-.501	.089
13 気軽に頼ったり頼られたりすることができる	.514	-.061	-.248
4 ときどき友達が、本当は私を好いてくれているのではないかと、私と一緒にいたくないのではと心配になることがある	-.040	.701	.090
14 ちょっとしたこと、すぐに自信をなくしてしまう	-.257	.666	-.234
2 人は本当はいやいやながら私と親しくしてくれているのではないかと思うことがある	-.167	.662	.085
11 あまり自分に自信が持てない方だ	-.443	.560	-.364
8 自分を信用できないことがよくある	-.209	.462	.095
12 あまり人と親しくなるのは好きでない	-.279	.000	.692
16 どんなに親しい間柄であろうと、あまりなれなれしい態度をとられると嫌になってしまう	-.121	-.111	.588
9 あまりにも親しくされたり、こちらが望む以上に親しくなることを求められたりすると、イライラしてしまう	-.205	-.067	.575
6 私は人に頼らなくても、自分一人で充分にうまくやっつけけると思う	.351	-.017	.548
15 人は全面的には信用できないと思う	-.136	.243	.477
3 人に頼るのは好きでない	.148	-.047	.391
17 私はいつも人と一緒にいたがるので、ときどき人から疎まれてしまう	.091	.367	-.095
因子負荷量の2乗和	3.692	2.568	2.142
因子の寄与率 (%)	20.509	14.269	11.903
累積寄与率 (%)	20.509	34.778	46.680

□で囲ったもの .400以上

なお各因子構造は、数多くの先行研究(戸田,1988など)において得られた結果とほぼ共通していた。したがって各因子名は、先行研究より引用して命名した。第I因子は、「5 私はすぐに人と親しくなる方だ」、「1 私は知り合いができやすい方だ」、「18 初めて会った人とでもうまくやっつけける自信がある」などの項目が高く負荷しており、これを<安定>因子と命名した。第II因子は、「4 ときどき友達が、本当は私を好いてくれているのではないかと、私と一緒にいたくないのではと心配になることがある」、「14 ちょっとしたこと、すぐに自信をなくしてしまう」、「2 人は本当はいやいやながら私と親しくしてくれているのではないかと思うこと



がある」などの項目が高く負荷しており、これを<アンビバレント>因子と命名した。第Ⅲ因子は、「12 あまり人と親しくなるのは好きでない」、「16 どんなに親しい間柄であろうと、あまりなれなれしい態度をとられると嫌になってしまう」、「9 あまりに親しくされたり、こちらが望む以上に親しくなることを求められたりすると、イライラしてしまう」などの項目が高く負荷しており、これを<回避>因子と命名した。

また、第Ⅰ因子において因子負荷量が高く、二重に負荷していない4項目の合計を<安定>得点とし、以下同様に第Ⅱ因子の4項目の合計を<アンビバレント>得点、第Ⅲ因子の5項目の合計得点を<回避>得点とした。

なお各因子ごとにCronbachの $\alpha$ 係数を求めたところ、<安定>因子では.841、<アンビバレント>因子は.727、<回避>因子は.704となっており、内的整合性は高いと考えられる。

#### 5. 幼少期および現在の母親に対する身体接触場面での感情についてのt検定

幼少期の母親を対象にしたTESの下位尺度3つと、現在の母親を対象にしたTESの下位尺度3つにおいて、同名の下位尺度得点を比較するために、t検定を行った(表4)。

表4 幼少期および現在の母親に対するTES各尺度得点における平均値と標準偏差ならびにt検定の結果

	幼少期の母親に対する			現在の母親に対する		
	<接触快>得点	<接触不快>得点	<接触葛藤>得点	<接触快>得点	<接触不快>得点	<接触葛藤>得点
平均値	32.17	6.66	6.10	29.27	8.69	5.75
標準偏差	5.66	2.68	2.60	6.07	3.74	2.64
t値 (自由度)	幼少期<接触快>得点 現在<接触快>得点			幼少期<接触不快>得点 現在<接触不快>得点		
	5.71** (82)			6.13** (82)		
				n=83      **p<.01		

その結果、母親に対する<接触快>得点は現在より幼少期のほうが高く、また、母親に対する<接触不快>得点は幼少期より現在のほうが高く、それぞれには有意な差が見られた。

## 6, 幼少期および現在の母親との身体接触場面における感情傾向の関連

幼少期および現在における母親との身体接触場面での感情傾向の関連を調べるため、ピアソンの積率相関係数を求めた(表5)。

表5 幼少期および現在の母親に対するTES 尺度得点間の相関係数

	現在の母親に対する		
	<接触快>得点	<接触不快>得点	<接触葛藤>得点
幼少期の母親に対する			
<接触快>得点	.69**	-.40**	.02
<接触不快>得点	-.34**	.60**	.24*
<接触葛藤>得点	-.04	.23*	.72**

n=83 \*\*p<.01, \*p<.05

その結果、幼少期の<接触快>得点においては、現在の<接触快>得点との間に強い正の相関が、<接触不快>得点との間に中程度の負の相関が有意に見られた。また幼少期の<接触不快>得点においては、現在の<接触快>得点との間に中程度の負の相関が、<接触不快>得点との間に比較的強い正の相関が、<接触葛藤>得点との間に弱い正の相関が有意に見られた。幼少期の<接触葛藤>得点においては、現在の<接触不快>得点との間に弱い正の相関が、<接触葛藤>得点との間に強い負の相関が有意に見られた。

## 7, 現在の母親との身体接触場面における感情傾向と内的ワーキング・モデルの関連

現在における母親との身体接触場面での感情傾向と、対人関係において影響を及ぼすとされている内的ワーキング・モデルとの関連を調べるため、ピアソンの積率相関係数を求めた(表6)。

その結果、<接触葛藤>得点と<安定>得点との間に中程度の負の相関が見られ、また<接触不快>得点と<回避>得点との間、<接触葛藤>得点と<回避>得点との間にはそれぞれ弱い正の相関が見られた。

表6 現在の母親に対するTESと内的ワーキング・モデル尺度 尺度得点間の相関係数

	内的ワーキング・モデルの		
	<安定>得点	<アンビバレント>得点	<回避>得点
現在の母親に対する			
<接触快>得点	.15	-.18	-.21
<接触不快>得点	-.04	.13	.30**
<接触葛藤>得点	-.39**	.09	.28*
		n=83	**p<.01, *p<.05

## 8. 母親との身体接触の頻度に対する認識と過去・現在の母親との身体接触場面における感情傾向および内的ワーキング・モデルの関連

幼少期における母親との身体接触の頻度に対する認識について、度数分布を表7に示した。

表7 母親との身体接触の頻度に対する認識についての度数分布表

	度数(%)
よくさわられた	23( 27.71)
まあまあさわられた	47( 56.63)
あまりさわられなかった	8( 9.64)
全然さわられなかった	0( 0.00)
思い出せない	5( 6.02)
合計	83

次に、回答項目それぞれが表す意味を考慮し、「よくさわられた」を<認識高>群に、「まあまあさわられた」を<認識中>群に群分けした。これ以降の分析においては、この2群を対象に行う。なお回答者の少なかった「あまりさわられなかった」や「思い出せない」、また回答者の見られなかった「全然さわられなかった」に関しては、分析から除外した。上記のような分類を行った上で、母親との身体接触頻度に対する認識2群において、a) 幼少期の母親との身体接触場面における感情傾向の各下位尺度得点の平均値を比較する、b) 現在の母親との身体接触場面における感情傾向の各下位尺度得点の平均値を比較する、c) 内的ワーキング・モデルの

各下位尺度得点の平均値を比較するために、t検定を行った（表8）。

表8 幼少期および現在の母親に対するTESと内的ワーキング・モデル尺度 各尺度得点における認識群別の平均値と標準偏差ならびにt検定の結果

接触頻度の認識	<認識高>群 n=23	<認識中>群 n=47
幼少期の母親への		
<接触快>得点	36.09(5.36)	31.92(3.88)
t値(自由度)		3.71(68)**
<接触不快>得点	5.91(2.35)	6.66(2.51)
t値(自由度)		1.19(68)
<接触葛藤>得点	6.22(2.73)	6.17(1.99)
t値(自由度)		0.08(68)
現在の母親に対する		
<接触快>得点	33.70(6.05)	28.92(4.46)
t値(自由度)		3.74(68)**
<接触不快>得点	6.83(2.73)	8.81(3.17)
t値(自由度)		2.57(68)*
<接触葛藤>得点	5.13(2.05)	5.92(2.30)
t値(自由度)		1.39(68)
内的ワーキング・モデルの		
<安定>得点	15.87(4.54)	14.32(3.59)
t値(自由度)		1.55(68)
<アンビバレント>得点	15.17(3.92)	15.79(3.49)
t値(自由度)		0.66(68)
<回避>得点	12.30(4.45)	14.06(4.25)
t値(自由度)		1.60(68)

( )は標準偏差 \*\*p<.01, \*p<.05

その結果、幼少期の母親に対する<接触快>得点において、<認識高>群の平均値が<認識中>群より有意に高かった。また、現在の母親に対する<接触快>得点は、<認識高>群の平均値が<認識中>群より有意に高く、一方<接触不快>得点においては、<認識中>群の平均値が<認識高>群より有意に高かった。なお、内的ワーキング・モデルの各下位尺度得点の平均値においては、有意な差が見られなかった。

## 9. 母親との身体接触に対する満足感と過去・現在の母親との身体接触場面における感情傾向および内的ワーキング・モデルの関連

幼少期における母親との身体接触に対する満足感について、度数分布を表9に示した。

表9 母親との身体接触に対する満足感についての度数分布表

	度数(%)
とても満足している	42( 50.60)
まあまあ満足している	32( 38.55)
もう少しさわってほしかった	2( 2.41)
もっとさわってほしかった	1( 1.20)
さわられたくなかった	0( 0.00)
何も思わない	6( 7.23)
合計	83

次に、回答項目それぞれが表す意味を考慮し、「とても満足している」を<大満足>群に、「まあまあ満足している」を<満足>群に群分けした。これ以降の分析においては、この2群を対象に行う。なお、回答者の少なかった「もう少しさわってほしかった」や「もっとさわってほしかった」、「何も思わない」、および回答者の見られなかった「さわられたくなかった」に関しては、分析から除外した。上記のような分類を行った上で、これまでの母親との身体接触に対する満足感2群において、a) 幼少期の母親との身体接触場面における感情傾向の各下位尺度得点の平均値を比較する、b) 現在の母親との身体接触場面における感情傾向の各下位尺度得点の平均値を比較する、c) 内的ワーキング・モデルの各下位尺度得点の平均値を比較するために、t検定を行った(表10)。

その結果、幼少期の母親に対する<接触快>得点において、<大満足>群の平均値が<満足>群より有意に高く、<接触不快>得点においては、<満足>群の平均値が<大満足>群より有意に高かった。現在の母親に対する<接触快>得点においては、<大満足>群の平均値が<満足>群より有意に高く、また、<接触不快>得点および<接触葛藤>得点においては、<満足>群の平均値が<大満足>群より有意に高かった。なお、内的ワー

表10 幼少期および現在の母親に対するTESと内的ワーキング・モデル尺度 各尺度得点における満足群別の平均値と標準偏差ならびにt検定の結果

身体接触に対する満足感	<大満足>群 n=42	<満足>群 n=32
幼少期の母親への		
<接触快>得点	34.00 (4.97)	30.81 (5.39)
t 値(自由度)		2.64 (72)*
<接触不快>得点	6.02 (2.17)	7.66 (3.09)
t 値(自由度)		2.67 (72)**
<接触葛藤>得点	5.67 (2.07)	6.56 (2.53)
t 値(自由度)		1.68 (72)
現在の母親に対する		
<接触快>得点	31.36 (5.75)	28.19 (5.60)
t 値(自由度)		2.38 (72)*
<接触不快>得点	7.76 (3.50)	9.81 (3.57)
t 値(自由度)		2.48 (72)*
<接触葛藤>得点	5.05 (1.98)	6.16 (2.19)
t 値(自由度)		2.28 (72)*
内的ワーキング・モデルの		
<安定>得点	15.36 (3.78)	14.72 (3.74)
t 値(自由度)		0.72 (72)
<アンビバレント>得点	14.79 (3.54)	16.22 (2.80)
t 値(自由度)		1.88 (72)
<回避>得点	13.36 (4.30)	13.50 (4.17)
t 値(自由度)		0.14 (72)

( )は標準偏差 \*\*p<.01, \*p<.05

キング・モデルの各下位尺度得点の平均値においては、有意な差が見られなかった。

## 10、母親との身体接触に対する頻度の認識と満足感の関連

上記8の手続きにより群分けした、幼少期の母親との身体接触の頻度に対する認識2群と、上記9の手続きによって群分けした、幼少期における母親との身体接触に対する満足感2群との関連を見るために、Fisherの直説法を用いて検定を行った(表11)。

その結果、母親との身体接触の頻度に対する<認識高>群においては、<認識中>群に比べて<大満足>群に分類される人数が有意に多いことが示された(p<.01)。

表11 母親との身体接触の頻度に対する認識と満足感とのクロス表

	<大満足>群	<満足>群	合計 (%)
<認識高>群	18( 85.7)	3( 14.3)	21(100.0)
<認識中>群	20( 45.5)	24( 54.5)	44(100.0)
合計	38( 58.5)	27( 41.5)	65(100.0)

## 11、居住形態と現在の母親との身体接触場面における感情傾向の関連

住居の形態において、現在の母親との身体接触場面における感情傾向の各下位尺度得点の平均値を比較するために、t検定を行った（表12）。

表12 現在の母親に対するTES 尺度得点における平均値と標準偏差ならびに t 検定の結果

現在の居住形態	<一人暮らし> n=62	<親元暮らし> n=19
現在の母親に対する		
<接触快>得点	29.98(6.24)	27.47(4.84)
t 値(自由度)	1.61(79)	
<接触不快>得点	8.16(3.68)	10.11(3.73)
t 値(自由度)	2.01(79)*	
<接触葛藤>得点	5.48(2.60)	6.68(2.73)
t 値(自由度)	1.74(79)	

()は標準偏差 \*p<.05

その結果、現在の母親に対する<接触不快>得点においては、親元暮らしの方が一人暮らしより平均点が有意に高かった。

## 考察

本調査では、Touching Emotion Scale を作成し、大学生を対象に、回想法で幼少期および現在の養育者との身体接触場面における感情傾向を測定することによって、その構造を探り、幼少期と現在におけるその感情傾向の関連、および現在の養育者との身体接触場面における感情傾向と内的ワーキング・モデルとの関連を検討することが目的であった。主な養育者

を母親と選んだ女子のみ分析対象として因子分析した結果、行動レベルにおいては「さわる」、「さわらない」という単純構造の身体接触が、感情レベルにおいては、母親との身体接触から快を得られる〈接触快〉因子、母親との身体接触に不快を感じる〈接触不快〉因子、母親と身体的ふれあいを求める一方で不安を感じる〈接触葛藤〉因子の3因子からなる複雑な構造であることがわかった。

幼少期と現在の母親との身体接触場面で抱く感情傾向の関連については、たとえば、幼少期に母親との身体接触を快と感じていればいるほど、現在においてもそれを快と感じる傾向があったように、両時期の感情にかなり強い結びつきのあることが示された。また、幼少期の母親との身体接触に対する頻度への認識や満足感については、本調査において8割以上の女子がそれに対し肯定的な回答をしており、中でも、母親からよくさわって育てられたと感じている者ほど、あるいは母親との身体接触をとっても満足している者ほど、現在においても母親との身体接触から快や安心感を得られると想定していた。

この幼少期と現在の感情傾向の関連について特に興味深い点は、幼少期に母親との身体接触を不快と感じていればいるほど、現在において同じく不快を感じる傾向が強かったことのほかに、葛藤を感じやすい傾向が弱いながら見られたこと、また、幼少期に母親との身体接触に葛藤を感じていればいるほど、現在において同じく葛藤を感じる傾向が強かったことのほかに、不快を感じやすい傾向が弱いながら見られたことである。これらの結果より、身体接触に対する不快感情が強い者の中には、接触行動自体に強い不快を感じている者のほかに、身体接触に対する不快感情の根底で「さわりたいけれど不安だ」というような葛藤が見え隠れしている者が存在すること、他方、身体接触に対する葛藤感情が強い者の中には、接触行動自体に強い葛藤を感じている者のほかに、身体接触に対する葛藤が強いがために接触行動を不快に感じるという者が存在することが推測できるであろう。これらは、身体接触に対する感情傾向が、行動レベルで察しられる以



上に複雑な構造をなしていることを表す結果の1つであると考えられる。

ここで問題にされやすいことは、幼少期における感情が本人によって回顧的に語られたものに過ぎず、つまりは現在の母親への感情が幼少期の回答に影響を与えているのでは、という点についてである。しかし、必ずしも現在の母子関係の良さが過去についての記述も良くするとは限らないことが、山岸(2000)の女子青年による回想的な生育史の記述調査から示唆されている。たとえば、山岸の調査の中で、幼少期に母子関係で問題を感じていた者が、中・高校時に良好な友人関係に恵まれたことによって対人的枠組みを変化させ、その後の母親への認知にも影響を与えていたように、現在の母親との関係の質は、それまでの母親との関係だけでなく、その他の人との関係がどうであったかの影響を受けると考えられる。その点を踏まえて考えるならば、本調査において母親に対する身体接触時の感情傾向が幼少期と現在で深く関連していたという結果は、相手に直接的で強く働きかける要素を持った身体接触によるコミュニケーションが、想像以上にわれわれの記憶に残り、現在にまで影響を与えていると考えることができるであろう。

次に、現在の母親との身体接触時の感情傾向と内的ワーキング・モデルを調べたところ、弱い関連ではあるが、回避傾向の高い愛着を示す者は母親との身体接触を不快、もしくは葛藤を感じるものとして受け止める傾向のあることが示された。その一方で、安定傾向の高い愛着を示す者にとっては、身体接触への葛藤が少ない傾向が見られた。これより、身体接触場面における感情傾向と内的ワーキング・モデルの間には、部分的に関連があったということができよう。

この結果は、Ainsworthが行ったStrange Situation Procedure(以下、SSPと略す)において、乳児に見られた行動とほぼ対応するものであった。たとえばアタッチメントが安定型の乳児は、新奇場面における短時間の母親との分離に対して苦痛を感じながらも、再会時にはストレスを解消するために母親との身体接触を進んで求めていくが、回避型の乳児は、母親に

対して接触を求めようとしないうるばかりか、視線をそむけるような行動さえ見られた。このSSPでの乳児の行動は、現象的には接近あるいは回避のいずれかに過ぎないが、今回の調査で得られた母親との身体接触場面での感情傾向3因子が乳児にも当てはまるとするならば、それを把握できる、できないは別にして、乳児は複雑な感情構造をなしている、と考えるべきであろう。

しかしこの結果のみから、回避型の乳児と回避傾向の高い青年の心理的過程を同類のものとして扱おうとすることには問題がある。なぜならば、幼少期と現在の母親に対する<接触快>因子および<接触不快>因子としてあらわれた感情傾向は、幼少期に比べ青年期では、母親との身体接触から快を得られると感じることが減少し、反対に不快だと感じることのほうが増加するように、量的側面においてそれぞれ変化しているからである。その理由の1つには、青年期が親子関係において、心理的離乳の行われる時期であることがあげられるだろう(落合・佐藤, 1996:小高, 1998)。自立を望む青年にとって親との身体接触は、本来得られるとされる快とは程遠い感情を呼び起こしてしまう可能性も考えられる。よって、身体接触の研究においては、乳児期や青年期といった発達段階のある一時期のみを取り上げて議論が進められるべきではなく、縦断的研究によって発達段階ごとの身体接触の意味や、身体接触を求めていく対象の変化などについて探索する必要があるだろう。特に、孤独感を抱きやすいとされている老年期を対象に、身体接触が与える影響や、それを求める感情の有無などについて調査することは、高齢社会を迎えるにあたって意義深いことだと思われる。

なお本調査では、現在一人暮らしをしている者に比べ、親と同居している者のほうが、現在の母親との接触に対して不快を多く感じていた。これは親と同居している者が、回答をする際に親との身体接触をより現実的に想定した結果ではないかと考えられる。人は、タッチされることによって自己の精神状態を客観的に見る(土蔵, 2001)と指摘されているように、対人間の接触行動は、人々の感情に大きな影響を与えうる。今後、研究を進

めていく中で、身体接触に対する感情をより正確に捉えるためには、調査時に被験者が対象人物と物理的にどれほど近い位置にいるかなどについて統制をし、その上で被験者による感情傾向の違いを理解していく姿勢が必要であろう。

## 調査 2

### 目的

幼少期の母親との身体接触場面における感情傾向と、恋人との身体接触場面での感情傾向の関連を探る。また、恋人との身体接触場面で抱く感情と内的ワーキング・モデルの関連について検討する。

### 方法

#### (1) 調査対象

兵庫県下の国立大学に通う大学生および愛知県下の私立大学に通う大学生476名（男子264名、女子208名、不明4名）を対象とした。そのうち有効回答数は男子185、女子162であった。これより以下の分析においては、幼少期の養育者を母親と選んでいた男子153名、女子155名を分析対象とした。なお恋人に関する分析では、恋人がいる、または、過去にいたと答えた人のみを対象にした。対象者の年齢は19歳から25歳で、平均20.5歳であった。

#### (2) 調査手続

講義の一部を利用して、以下の各尺度により構成された質問紙を配布し、集団で実施した（2000年11月下旬）。

#### (3) 測定内容

##### 1. フェイスシート

性別、年齢のほか、現在の居住形態について一人暮らし、親元暮らし、その他の中から回答を求めた。

##### 2. 幼少期における養育者との身体接触場面での感情傾向

幼少期における養育者との身体接触場面での感情を測定するために、調査1で使用したTES（20項目）に修正を加え再作成したTESversion2（16項目）を使用した。なお、この項目上の人物は「生まれてから中学校に上がるまでの間で、体にさわられる回数（性的な意味は含まれない）がもっとも多かった養育者」と設定し、各項目に対しては「全くあてはまらない」（1点）から「非常にあてはまる」（6点）までの6段階評定で回答を求めた。

### 3, 養育者との身体接触に対する頻度の認識

養育者からどの程度体をさわって育てられたと認識しているかについて、「よくさわられた」から「全然さわられなかった」までの4段階評定に「思い出せない」を入れて、5つの中から回答を求めた。

### 4, 養育者との身体接触に対する満足感

これまでに養育者との間で行ってきた身体接触を、現在どのように感じているかについて、「とても満足している」「まあまあ満足している」「もう少しさわってほしかった」「もっとさわってほしかった」「さわられなくなかった」「何も思わない」の6つの中から回答を求めた。

### 5, 現在または過去における恋人との身体接触場面での感情傾向

現時点での恋人、または現時点において恋人がいない場合は過去の恋人との身体接触場面における感情を測定するため、はじめに TESversion 2（16項目）の項目上の人物を、各被験者によって「現在の恋人」または「過去の恋人」のどちらかへ設定させた。なお、これまでに恋人がいなかった場合は、上記1の「幼少期における養育者」と同一の人物を設定させた。各項目に対して「全くあてはまらない」（1点）から「非常にあてはまる」（6点）までの6段階評定により回答を求めた。

### 6, 内的ワーキング・モデル

一般的な対人関係における感情傾向を測定するため、戸田（1988）により構成された内的ワーキング・モデル尺度（18項目）を用い、各項目に対して「全くあてはまらない」（1点）から「非常にあてはまる」（6点）までの6段階評定によって回答を求めた。

## 結果

### 1. 幼少期の母親との身体接触場面における感情傾向の因子分析

幼少期における母親との身体接触場面での感情に関する16項目を、男女別に主因子法・Promax回転により因子分析し、固有値と解釈可能性を考慮して3因子を抽出した（表13, 表14）。

表13 幼少期の母親との身体接触場面における感情傾向の因子分析結果（男子）

項目内容	因子1	因子2	因子3
15 Aさんから一方的にさわられると、不安を感じていたと思う	.837	.111	-.074
14 私にとって、Aさんからさわられることは不幸なことであった	.829	-.046	.000
12 たとえAさんでも、私は自分の体にさわられると嫌悪感を抱いていた	.828	-.068	-.027
10 私はAさんからさわられる時、恐怖を感じていた	.789	.048	-.005
11 私は、Aさんがいやいや私の体にさわっているのではないか、と感じていた	.741	-.003	.156
8 私は、Aさんがあまりに私の体にさわってくるのでいやだった	.715	.055	.006
4 私は、Aさんの体にさわりたいなかった	.620	-.053	-.159
16 私は、Aさんからさわられることに心地よさを感じていた	.066	.929	-.060
9 私は、Aさんが私の体をさすってくればリラックスすることができた	.007	.873	-.121
13 不安で仕方ない時、Aさんが背中を手を置いてくれば安心したと思う	.027	.847	-.108
7 私は、Aさんの体にさわれることを心地よく感じていた	.078	.793	.081
1 私は、不安で仕方なかった時、Aさんにふれることで安心感を得られていたと思う	-.068	.756	.102
3 私は、Aさんとふれあっている時うれしかった	-.118	.655	.336
5 私は、Aさんがしてくれていた以上に体のふれあいを求めていた	-.092	.135	.632
2 私は、AさんにさわることによってAさんの感情を損わせてしまうのではないか、という不安を感じていた	.327	-.123	.564
6 私は、Aさんが私にさわられることを望んでいないのではないか、と感じていた	.395	.021	.395
累積寄与率 (%)	61.361		

□で囲ったもの .400以上

男子における第I因子は、「15 Aさんから一方的にさわられると、不安を感じていたと思う」、「14 私にとって、Aさんからさわられることは不幸なことであった」、「12 たとえAさんでも、私は自分の体にさわられると嫌悪感を抱いていた」などの項目が高く負荷しており、身体接触に対する否定的な感情を読み取ることができる。したがって、これらの項目を<接触

不快>因子と命名した。第Ⅱ因子は、「16 私は、Aさんからさわられることに心地よさを感じていた」、「9 私は、Aさんが私の体をさすってくれればリラックスすることができた」、「13 不安で仕方ない時、Aさんが背中に手を置いてくれれば安心したと思う」などの項目が高く負荷しており、身体接触に対する肯定的な感情を読み取ることができる。したがって、これらの項目を<接触快>因子と命名した。第Ⅲ因子は、「5 私は、Aさんがしてくれていた以上に体のふれあいを求めている」、「2 私は、AさんにさわることによってAさんの感情を損わせてしまうのではないか、という不安を感じていた」といった項目が高く負荷しており、身体接触に対するアンビバレントな感情を読み取ることができる。したがって、これらの項目を<接触葛藤>因子と命名した。

続いて、女子の因子構造は男子と共通していた。第Ⅰ因子は、「14 私にとって、Aさんからさわられることは不幸なことであった」、「12 たとえAさんでも、私は自分の体にさわられると嫌悪感を抱いていた」、「15 Aさんから一方的にさわられると、不安を感じていたと思う」などの項目が高く負荷しており、男子の第Ⅰ因子とほぼ対応していた。したがって、先と同様に<接触不快>因子と命名した。第Ⅱ因子は、「7 私は、Aさんの体にさわられることを心地よく感じていた」、「16 私は、Aさんからさわられることに心地よさを感じていた」、「1 私は、不安で仕方なかった時、Aさんにふれることで安心感を得られていたと思う」などの項目が高く負荷しており、男子の第Ⅱ因子とほぼ対応していた。したがって、<接触快>因子と命名した。第Ⅲ因子は、「2 私は、AさんにさわることによってAさんの感情を損わせてしまうのではないか、という不安を感じていた」、「6 私は、Aさんが私にさわられることを望んでいないのではないか、と感じていた」、「5 私は、Aさんがしてくれていた以上に体のふれあいを求めている」といった項目が高く負荷しており、これについても男子の第Ⅲ因子とほぼ対応していた。したがって、<接触葛藤>因子と命名した。

表14 幼少期の母親との身体接触場面における感情傾向の因子分析結果（女子）

項目内容	因子1	因子2	因子3
14 私にとって、Aさんからさわられることは不幸なことであった	.962	.075	-.098
12 たとえAさんでも、私は自分の体にさわられると嫌悪感を抱いていた	.804	-.077	-.130
15 Aさんから一方的にさわられると、不安を感じていたと思う	.782	.039	-.002
11 私は、Aさんがいやいや私の体にさわっているのではないかと感じていた	.761	.116	.241
10 私はAさんからさわられる時、恐怖を感じていた	.756	.088	.139
4 私は、Aさんの体にさわりたい欲がなかった	.499	-.253	.013
8 私は、Aさんがあまりに私の体にさわってくるのでいやだった	.466	-.156	.149
7 私は、Aさんの体にさわられることを心地よく感じていた	.241	.910	-.144
16 私は、Aさんからさわられることに心地よさを感じていた	.015	.835	-.046
1 私は、不安で仕方なかった時、Aさんにふれることで安心感を得られていたと思う	.096	.731	-.004
3 私は、Aさんとふれあっている時うれしかった	.075	.727	.014
9 私は、Aさんが私の体をさすってくれればリラックスすることができた	-.159	.695	.033
13 不安で仕方ない時、Aさんが背中を手を置いてくれれば安心したと思う	-.221	.591	.091
2 私は、AさんにさわることによってAさんの感情を損わせてしまうのではないかと、という不安を感じていた	.102	-.131	.712
6 私は、Aさんが私にさわられることを望んでいないのではないかと感じていた	.144	-.067	.595
5 私は、Aさんがしてくれていた以上に体のふれあいを求めていた	-.119	.340	.545
累積寄与率（%）		57.286	

□で囲ったもの .400以上

## 2. 恋人との身体接触場面における感情傾向の因子分析

現在および過去における恋人との身体接触場面での感情に関する16項目を、男女別に主因子法・Promax回転により因子分析し、固有値と解釈可能性を考慮して3因子を抽出した（表15, 表16）。

男子においての第I因子は、「7 私は、Bさんの体にさわられることを心地よく感じる<心地よく感じていた；以下、過去形の表記は略す>」、「3 私はBさんとふれあっている時、喜びを感じることができる」、「1 不安で仕方ない時、Bさんにふれることで安心感を得られる」などの項目が高く負荷しており、幼少期の母親との身体接触場面を想定した際の第II因子とほぼ対応していた。したがって、先と同様に<接触快>因子と命名した。第II因子は、「10 私はBさんからさわられる時、恐怖を感じている」、「14 私にとって、Bさんからさわられることは不幸なことである」、「15 私はBさん



表15 恋人との身体接触場面における感情傾向の因子分析結果（男子）

項目内容	因子1	因子2	因子3
7 私は、Bさんの体にさわることを心地よく感じる（心地よく感じていた）	.916	.143	-.169
3 私はBさんとふれあっている時、喜びを感じることができる（感じていた）	.879	.032	-.028
1 不安で仕方ない時、Bさんにふれることで安心感を得られる（得られていた）	.801	-.002	.002
16 私は、Bさんからさわられることに心地よさを感じることができる（感じていた）	.742	-.209	.110
9 もしBさんが私の体をマッサージしてくれるならば、その時私はリラックスできると思う（リラックスしていたと思う）	.665	-.020	-.181
13 不安で仕方ない時、Bさんが私の背中に手を置いてくれると安心できると思う（安心できていたと思う）	.636	-.045	.009
5 私は心の中で、Bさんとの今以上の身体的ふれあいを求めている（交際当時に求めている）	.558	.001	.245
10 私はBさんからさわられる時、恐怖を感じている（感じていた）	.086	.920	-.075
14 私にとって、Bさんからさわられることは不幸なことである（不幸なことであった）	-.154	.715	-.106
15 私はBさんから一方的にふれられると、不安を感じると思う（感じていたと思う）	.036	.641	.200
11 私は、Bさんがいやいや私の体にさわっているのではないかと感じる（感じていた）	.231	.639	.334
12 たとえBさんであっても、私は自分の体にさわられると嫌悪感を抱く（抱いていた）	-.286	.572	-.008
4 私は、Bさんの体にさわりたくない（さわりたくなかった）	-.218	.549	.001
8 あまりにもBさんが私の体にさわってくるといやになる（いやだった）	-.324	.435	-.038
2 私は、BさんにさわることによってBさんの感情を損わせてしまうのではないかと、という不安を感じる（感じていた）	-.053	-.060	.889
6 私は、Bさんが私にさわられることを望んでいないのではないかと感じる（感じていた）	-.027	.076	.803
累積寄与率（%）	59.838		

□で囲ったもの .400以上

から一方的にふれられると、不安を感じると思う」などの項目が高く負荷しており、幼少期の母親との身体接触場面を想定した際の第I因子とほぼ対応していた。したがって、＜接触不快＞因子と命名した。第III因子は、「2 私は、BさんにさわることによってBさんの感情を損わせてしまうのではないかと、という不安を感じる」、「6 私は、Bさんが私にさわられることを望んでいないのではないかと、と感じる」といった項目が高く負荷しており、身体接触に対する不安さを読み取ることができる。なお、幼少期の母親との身体接触場面を想定した際の第III因子とは、身体接触への要求が混在していない点で異なっていた。したがって＜接触不安＞因子と命名した。

続いて、女子の因子構造は男子と共通していた。第I因子は、「7 私は、Bさんの体にさわることを心地よく感じる」、「3 私はBさんとふれあっている時、喜びを感じることができる」、「1 不安で仕方ない時、Bさんにふれ

表16 恋人との身体接触場面における感情傾向の因子分析結果（女子）

項目内容	因子1	因子2	因子3
7 私は、Bさんの体にさわることを心地よく感じる（心地よく感じていた）	.926	.136	-.147
3 私はBさんとふれあっている時、喜びを感じることができる（感じていた）	.860	-.132	.115
1 不安で仕方ない時、Bさんにふれることで安心感を得られる（得られていた）	.829	-.037	-.041
16 私は、Bさんからさわられることに心地よさを感じることができる（感じていた）	.824	-.137	.190
13 不安で仕方ない時、Bさんが私の背中に手を置いてくれると安心できると思う（安心できていたと思う）	.794	-.054	-.099
9 もしBさんが私の体をマッサージしてくれるならば、その時私はリラックスできると思う（リラックスしていたと思う）	.675	.049	-.261
5 私は心の中で、Bさんと今以上の身体的ふれあいを求めている（交際当時に求めている）	.596	.029	.265
14 私にとって、Bさんからさわられることは不幸なことである（不幸なことであった）	-.062	.921	-.108
10 私はBさんからさわられる時、恐怖を感じている（感じていた）	-.003	.841	.056
15 私はBさんから一方的にふれられると、不安を感じると思う（感じていたと思う）	.069	.743	-.067
12 たとえBさんであっても、私は自分の体にさわられると嫌悪感を抱く（抱いていた）	-.199	.577	.140
4 私は、Bさんの体にさわりたくない（さわりたくなかった）	-.297	.573	.048
6 私は、Bさんが私にさわられることを望んでいないのではないかと感じる（感じていた）	.032	-.114	.850
2 私は、BさんにさわることによってBさんの感情を損わせてしまうのではないかと、という不安を感じる（感じていた）	-.012	-.065	.691
11 私は、Bさんがいやいや私の体にさわっているのではないかと感じる（感じていた）	.235	.280	.659
8 あまりにもBさんが私の体にさわってくるといやになる（いやだった）	-.046	.368	.253
累積寄与率（%）	63.381		

□で囲ったもの .400以上

ることで安心感を得られる」などの項目が高く負荷しており、男子の第Ⅰ因子とほぼ対応していた。したがって、先と同様に＜接触快＞因子と命名した。第Ⅱ因子は、「14 私にとって、Bさんからさわられることは不幸なことである」、「10 私はBさんからさわられる時、恐怖を感じている」、「15 私はBさんから一方的にふれられると、不安を感じると思う」などの項目が高く負荷しており、男子の第Ⅱ因子とほぼ対応していた。したがって＜接触不快＞因子と命名した。第Ⅲ因子は、「6 私は、Bさんが私にさわられることを望んでいないのではないかと感じる」、「2 私は、BさんにさわることによってBさんの感情を損わせてしまうのではないかと、という不安を感じる」「11 私は、Bさんがいやいや私の体にさわっているのではないかと感じる」といった項目が高く負荷しており、これについても男子の第Ⅲ因子とほぼ対応していた。したがって＜接触不安＞因子と命名した。

### 3, 幼少期の母親および恋人との身体接触場面における感情についての各3因子の信頼性係数

恋人に対する〈接触快〉因子において、男女双方で因子負荷量が.400以上であった7項目のうち、幼少期の母親に対する感情傾向の因子分析で抽出した〈接触快〉因子と共通していた項目1, 3, 7, 9, 13, 16の合計を、母親および恋人に対するそれぞれの〈接触快〉得点とした。同様に、恋人に対する〈接触不快〉因子においては、幼少期の母親に対する〈接触不快〉因子と共通していた項目4, 10, 12, 14, 15の合計をそれぞれの〈接触不快〉得点とした。恋人に対する〈接触不安〉因子においては、男女双方で因子負荷量が.400以上であった項目2, 6の合計得点を恋人に対する〈接触不安〉得点とした。また、幼少期の母親に対する〈接触葛藤〉因子においては、男女双方で因子負荷量が.400以上であった項目2, 5の合計得点を幼少期の母親に対する〈接触葛藤〉得点とした。

なお、各因子ごとのCronbachの $\alpha$ 係数を表17に示した。幼少期の母親に対する〈接触葛藤〉因子については、男女ともに $\alpha$ 係数の値がやや低かったが、因子の概念的必要性を重視し、分析の対象とすることにした。

表17 幼少期および恋人に対するTESと内的ワーキング・モデル尺度の $\alpha$ 係数

	幼少期の母親に対する			恋人に対する			内的ワーキング・モデルの		
	〈接触不快〉因子	〈接触快〉因子	〈接触葛藤〉因子	〈接触快〉因子	〈接触不快〉因子	〈接触不安〉因子	〈安定〉因子	〈アンビバレント〉因子	〈回避〉因子
$\alpha$ 係数									
男子	.863	.925	.566	.910	.856	.826	.871	.771	.655
女子	.861	.886	.514	.930	.888	.699	.904	.838	.711

### 4, 対人関係における感情傾向の因子分析

内的ワーキング・モデルに関する18項目を、男女別に主因子法・Varimax回転により因子分析し、固有値と解釈可能性を考慮して3因子を抽出した(表18, 表19)。

表18 対人関係における感情傾向の因子分析結果（男子）

項目内容	因子1	因子2	因子3
5 私はすぐに人と親しくなる方だ	.851	-.134	-.059
7 私は人に好かれやすい性質だと思う	.789	-.068	-.020
1 私は知り合いができやすい方だ	.781	-.062	-.085
18 初めて会った人とでもうまくやっていける自信がある	.743	-.179	-.011
10 たいいてい人は私のことを好いてくれていると思う	.704	-.111	.052
13 気軽に頼ったり頼られたりすることができる	.478	-.054	-.287
4 ときどき友達が、本当は私を好いてくれているのではないかと、私と一緒にいたくないのではと心配になることがある	.023	.684	.167
14 ちょっとしたこと、すぐに自信をなくしてしまう	-.141	.667	-.102
2 人は本当はいやいやながら私と親しくしてくれているのではないかと思うことがある	-.026	.635	.378
11 あまり自分に自信が持てない方だ	-.193	.614	-.074
8 自分を信用できないことがよくある	-.082	.518	.006
17 私はいつも人と一緒にいたが、ときどき人から疎まれてしまう	-.069	.493	.043
12 あまり人と親しくなるのは好きでない	-.329	.096	.643
9 あまりにも親しくされたり、こちらが望む以上に親しくなることを求められたりすると、イライラしてしまう	.034	.110	.577
6 私は人に頼らなくても、自分一人で充分にうまくやって行けると思う	.138	-.382	.549
16 どんなに親しい間柄であろうと、あまりなれなれしい態度をとられるといやになってしまう	-.080	.150	.484
3 人に頼るのは好きでない	.013	-.115	.466
15 人は全面的には信用できないと思う	-.219	.346	.449
因子負荷量の2乗和	3.489	2.601	1.986
因子の寄与率 (%)	19.381	14.451	11.033
累積寄与率 (%)	19.381	33.832	44.864

□で囲ったもの .400以上

なお男女それぞれの因子構造は、数多くの先行研究（詫摩・戸田, 1988 など）において得られた結果とほぼ共通していた。したがって各因子名は、先行研究より引用して命名した。

男子における第Ⅰ因子は、「5 私はすぐに人と親しくなる方だ」、「7 私は人に好かれやすい性質だと思う」、「1 私は知り合いができやすい方だ」などの項目が高く負荷しており、これらの項目を＜安定＞因子と命名した。第Ⅱ因子は、「4 ときどき友達が、本当は私を好いてくれているのではないかと、私と一緒にいたくないのではと心配になることがある」、「14 ちょっとしたこと、すぐに自信をなくしてしまう」、「2 人は本当はいや

いやながら私と親しくしてくれているのではないかと思うことがある」などの項目が高く負荷しており、これらの項目を<アンビバレント>因子と命名した。第Ⅲ因子は、「12 あまり人と親しくなるのは好きでない」、「9 あまりにも親しくされたり、こちらが望む以上に親しくなることを求められたりすると、イライラしてしまう」、「6 私は人に頼らなくても、自分一人で充分にうまくやって行けると思う」などの項目が高く負荷しており、これらの項目を<回避>因子と命名した。

表19 対人関係における感情傾向の因子分析結果（女子）

項目内容	因子1	因子2	因子3
5 私はすぐに人と親しくなる方だ	.871	-.087	-.009
1 私は知り合いが得意やすい方だ	.850	-.155	.026
18 初めて会った人とでもうまくやっける自信がある	.816	-.180	-.001
7 私は人に好かれやすい性質だと思う	.694	-.426	-.111
4 ときどき友達が、本当は私を好いてくれているのではないかと、私と一緒にいたくないのでは心配になることがある	-.111	.800	.217
2 人は本当はいやいやながら私と親しくしてくれているのではないかと思うことがある	-.213	.710	.313
8 自分を信用できないことがよくある	-.105	.671	.091
11 あまり自分に自信が持てない方だ	-.271	.664	-.024
10 たいいてい人は私のことを好いてくれていると思う	.450	-.565	-.112
14 ちょっとしたこと、すぐに自信をなくしてしまう	-.246	.564	-.077
3 人に頼るのは好きでない	-.077	-.037	.704
9 あまりにも親しくされたり、こちらが望む以上に親しくなることを求められたりすると、イライラしてしまう	.150	.119	.609
16 どんなに親しい間柄であろうと、あまりなれなれない態度をとられるといやになってしまう	.032	.188	.577
12 あまり人と親しくなるのは好きでない	-.245	.139	.544
13 気軽に頼ったり頼られたりすることができる	.363	-.085	-.511
6 私は人に頼らなくても、自分一人で充分にうまくやっけると思う	.172	-.252	.489
15 人は全面的には信用できないと思う	.001	.329	.331
17 私はいつも人と一緒にいたがるので、ときどき人から疎まれてしまう	.113	.276	-.209
因子負荷量の2乗和	3.298	3.243	2.335
因子の寄与率(%)	18.325	18.016	12.970
累積寄与率(%)	18.325	36.340	49.311

□で囲ったもの .400以上

続いて、女子の因子構造は男子と共通していた。第Ⅰ因子は、「5 私は

すぐに人と親しくなる方だ」、「1 私は知り合いができやすい方だ」、「18 初めて会った人とでもうまくやっていける自信がある」などの項目が高く負荷しており、これらの項目を<安定>因子と命名した。第Ⅱ因子は、「4 ときどき友達が、本当は私を好いてくれているのではないかとか、私と一緒にいたくないのではと心配になることがある」、「2 人は本当はいやいやながら私と親しくしてくれているのではないかと思うことがある」、「8 自分を信用できないことがよくある」などの項目が高く負荷しており、これらの項目を<アンビバレント>因子と命名した。第Ⅲ因子は、「3 人に頼るのは好きでない」、「9 あまりにも親しくされたり、こちらが望む以上に親しくなることを求められたりすると、イライラしてしまう」、「16 どんなに親しい間柄であろうと、あまりなれなれしい態度をとられるといやになってしまう」などの項目が高く負荷しており、これらの項目を<回避>因子と命名した。なお各因子ごとにCronbach の  $\alpha$  係数を求め、表16にあわせて表記した。

また、<安定>因子において男女双方で因子負荷量が.400以上であり、二重に負荷していない項目1, 5, 18の合計を<安定>得点とした。同様に<アンビバレント>因子においては、項目2, 4, 8, 11, 14の合計を<アンビバレント>得点、<回避>因子では項目3, 6, 9, 12, 16の合計を<回避>得点とした。

## 5. 各下位尺度の性差に対する t 検定

幼少期の母親および恋人を対象にしたTESの下位尺度と内的ワーキング・モデル尺度の下位尺度について、それぞれ男女別に下位尺度得点の平均値を比較するため t 検定を行った (表20)。

その結果、幼少期の母親に対する<接触快>得点では女子の平均値が、<接触不快>得点では男子の平均値が、それぞれ有意に高かった。また、恋人に対する<接触快>得点では女子の平均値が、<接触不快>得点、<接触不安>得点については男子の平均値が有意に高かった。なお、内的ワーキング・モデル尺度の各下位尺度得点の平均値については、男女間に有意

表20 幼少期の母親および恋人へのTESと内的ワーキング・モデル尺度 各尺度得点における男女の平均値と標準偏差ならびにt検定の結果

	幼少期の母親に対する			恋人に対する			内的ワーキング・モデルの		
	〈接触不快〉得点	〈接触快〉得点	〈接触葛藤〉得点	〈接触快〉得点	〈接触不快〉得点	〈接触不安〉得点	〈安定〉得点	〈アンビバレント〉得点	〈回避〉得点
標本数	男子153,女子155			男子136,女子129			男子153,女子155		
平均値(男)	10.14	21.37	4.61	27.81	9.25	5.57	10.71	17.74	15.78
(女)	7.32	26.44	4.59	29.72	7.96	4.19	11.08	18.22	15.19
標準偏差(男)	3.86	6.00	1.74	5.73	4.25	2.23	2.94	4.36	3.88
(女)	3.22	5.32	1.77	6.37	4.10	1.98	3.13	4.68	3.98
t値	6.98**	7.85**	0.10	2.57*	2.51*	5.35**	1.07	0.93	1.30
自由度	295	306	306	263	263	263	306	306	306

注)母分散が等しくない場合はWelchの検定を行った \*\*p<.01, \*p<.05

な差が見られなかった。

## 6. 身体接触場面での幼少期の母親に対する感情傾向と恋人に対する感情傾向の関連

幼少期における母親との身体接触場面での感情傾向と恋人との身体接触場面での感情傾向の関連を調べるため、幼少期の母親を対象にしたTESの下位尺度3つと、恋人を対象にしたTESの下位尺度3つにおいて、それぞれ男女別に各下位尺度間でピアソンの積率相関係数を求めた(表21)。

表21 幼少期の母親に対するTESと恋人に対するTES 尺度得点間の相関係数

		恋人に対する			
		〈接触快〉得点	〈接触不快〉得点	〈接触不安〉得点	
幼少期の母親への	〈接触不快〉得点	男子	-.21*	.42**	.20*
		女子	-.24**	.35**	.17
	〈接触快〉得点	男子	.27**	.00	.07
		女子	.27**	-.11	-.07
	〈接触葛藤〉得点	男子	-.07	.25**	.28**
		女子	-.01	.09	.05
		標本数	男子136,女子129	**p<.01, *p<.05	

その結果、男女ともに、幼少期の母親に対する〈接触快〉得点と恋人に対する〈接触快〉得点の間には弱い正の相関が見られ、幼少期の母親に対

する<接触不快>得点と恋人に対する<接触不快>得点の間には中程度の正の相関が見られた。また、幼少期の母親に対する<接触不快>得点と恋人に対する<接触快>得点との間には、男女ともに弱い負の相関が見られた。なお男子については、幼少期の母親に対する<接触不快>得点と恋人に対する<接触不安>得点との間や、幼少期の母親に対する<接触葛藤>得点と恋人に対する<接触不快>得点および<接触不安>得点との間に弱い正の相関が見られた。

## 7, 恋人との身体接触場面における感情傾向と内的ワーキング・モデルの関連

恋人との身体接触場面での感情傾向と、対人関係において影響を及ぼすとされている内的ワーキング・モデルの関連を調べるため、それぞれ男女別にピアソンの積率相関係数を求めた(表22)。

表22 恋人に対するTESと内的ワーキング・モデル尺度 尺度得点間の相関係数

		内的ワーキング・モデルの			
		<安定>得点	<アンビバレント>得点	<回避>得点	
恋人 に 対 す る	<接触快>得点	男子	.23**	.08	-.28**
		女子	.00	-.17*	-.21*
	<接触不快>得点	男子	-.17*	.03	.40**
		女子	.00	.25**	.29**
	<接触不安>得点	男子	-.34**	.40**	.13
		女子	-.05	.25**	.09

標本数 男子136, 女子129      \*\*p<.01, \*p<.05

その結果、男女ともに有意な相関が見られたのは、恋人に対する<接触快>得点と<回避>得点との間の負の相関、恋人に対する<接触不快>得点と<回避>得点との間の正の相関、恋人に対する<接触不安>得点と<アンビバレント>得点との間の正の相関においてであった。

## 8, 母親との身体接触の頻度に対する認識と幼少期の母親または恋人との身体接触場面における感情傾向および内的ワーキング・モデルの関連

幼少期における母親との身体接触の頻度に対する認識について、男女別



での度数分布を表23に示す。

表23 母親との身体接触の頻度に対する認識についての度数分布表

	男子(%)	女子(%)
よくさわられた	9( 5.88)	32(20.65)
まあまあさわられた	89( 58.17)	91(58.71)
あまりさわられなかった	33( 21.57)	25(16.13)
全然さわられなかった	3( 1.96)	2( 1.29)
思い出せない	19( 12.42)	5( 3.23)
合計	153	155

回答項目それぞれが表す意味を考慮し、「よくさわられた」、「まあまあさわられた」を<認識高>群に、「あまりさわられなかった」、「全然さわられなかった」を<認識低>群に群分けした。なお、回答者の少なかった「思い出せない」については分析から除外した。上記のような分類を行った上で、母親との身体接触頻度に対する認識2群において、a) 幼少期の母親との身体接触場面における感情傾向の各下位尺度得点の平均値を比較する、b) 恋人との身体接触場面における感情傾向の各下位尺度得点の平均値を比較する、c) 内的ワーキング・モデルの各下位尺度得点の平均値を比較するために、それぞれ男女別でt検定を行った(表24)。

その結果、幼少期の母親に対する<接触快>得点において、男女ともに<認識高>群の平均値が<認識低>群より有意に高く、また女子では、幼少期の母親に対する<接触不快>得点において、<認識低>群の平均値が<認識高>群より有意に高かった。恋人に対する<接触快>得点においては、男子の<認識高>群の平均値が<認識低>群より有意に高かった。なお、母親との身体接触頻度に対する認識2群において、内的ワーキング・モデルの各下位尺度得点の平均値には、男女ともに有意な差が見られなかった。

表24 幼少期の母親および恋人に対するTESと内的ワーキング・モデル尺度 各尺度得点における認識群別の男女の平均値と標準偏差ならびに t 検定の結果

接触頻度の認識	男子		女子	
	<認識高>群	<認識低>群	<認識高>群	<認識低>群
幼少期の母親への	n=98	n=36	n=123	n=27
<接触不快>得点	9.75 (3.85)	10.97 (3.75)	6.92 (2.87)	8.93 (4.04)
t 値(自由度)	1.65 (132)		2.45 (32)*	
<接触快>得点	23.33 (5.31)	18.81 (5.00)	27.63 (4.96)	22.26 (3.79)
t 値(自由度)	4.44 (132)**		5.29 (148)**	
<接触葛藤>得点	4.72 (1.74)	4.67 (1.85)	4.59 (1.72)	4.85 (1.96)
t 値(自由度)	0.17 (132)		0.71 (148)	
恋人に対する	n=84	n=36	n=101	n=23
<接触快>得点	28.69 (5.77)	26.17 (5.09)	30.11 (6.30)	28.22 (6.85)
t 値(自由度)	2.27 (118)*		1.28 (122)	
<接触不快>得点	8.99 (4.21)	10.22 (4.47)	7.88 (3.86)	8.35 (5.15)
t 値(自由度)	1.45 (118)		0.49 (122)	
<接触不安>得点	5.57 (2.33)	5.56 (1.93)	4.04 (1.88)	4.91 (2.21)
t 値(自由度)	0.04 (118)		1.94 (122)	
内的ワーキング・モデルの	n=98	n=36	n=123	n=27
<安定>得点	10.66 (3.11)	10.81 (2.70)	11.26 (3.19)	10.30 (2.99)
t 値(自由度)	0.24 (132)		1.44 (148)	
<アンビバレント>得点	17.69 (4.36)	18.14 (3.85)	17.94 (4.68)	19.67 (4.50)
t 値(自由度)	0.54 (132)		1.74 (148)	
<回避>得点	15.84 (3.97)	15.72 (3.37)	15.03 (3.93)	15.82 (4.05)
t 値(自由度)	0.15 (132)		0.93 (148)	

注) 母分散が等しくない場合はWelchの検定を行った \*\*p<.01, \*p<.05

## 9、母親との身体接触に対する満足感と幼少期の母親または恋人との身体接触場面における感情傾向および内的ワーキング・モデルの関連

幼少期における母親との身体接触に対する満足感について、男女別での度数分布を表25に示す。

回答項目それぞれが表す意味を考慮し、「とても満足している」を<大満足>群に、「まあまあ満足している」を<満足>群に、「何も思わない」

表25 母親との身体接触に対する満足感についての度数分布表

	男子(%)	女子(%)
とても満足している	40( 26.14)	68(43.87)
まあまあ満足している	65( 42.48)	62(40.00)
もう少しさわってほしかった	6( 3.92)	6( 3.87)
もっとさわってほしかった	2( 1.31)	3( 1.94)
さわられたくなかった	1( 0.65)	2( 1.29)
何も思わない	39( 25.49)	14( 9.03)
合計	153	155

を<無関心>群に群分けした。なお、回答者の少なかった「もう少しさわってほしかった」や「もっとさわってほしかった」、「さわられたくなかった」については、分析から除外した。上記のような分類を行った上で、これまでの母親との身体接触に対する満足感3群において、a) 幼少期の母親との身体接触場面における感情傾向の各下位尺度得点の平均値を比較する、b) 恋人との身体接触場面における感情傾向の各下位尺度得点の平均値を比較する、c) 内的ワーキング・モデルの各下位尺度得点の平均値を比較するために、一要因の分散分析をそれぞれ男女別に行った(表26)。

その結果、幼少期の母親に対する<接触不快>得点においては<無関心>群が、また<接触快>得点については<大満足>群が、男女ともに他の群と比べて有意に高かった。また、恋人に対する<接触快>得点においては、<大満足>群が男女ともに他の群と比べて有意に高く、<接触不快>得点については、女子において<満足>群や<無関心>群のほうが<大満足>群に比べて有意に高かった。さらに<接触不安>得点については、男子では<満足>群より<無関心>群が、女子では<大満足>群より<満足>群が有意に高かった。なお、母親との身体接触に対する満足感3群において、内的ワーキング・モデルの各下位尺度得点の平均値には、男女ともに有意な差が見られなかった。

表26 幼少期の母親および恋人へのTESと内的ワーキング・モデル尺度 各尺度得点における満足群別の男女の平均値と標準偏差ならびにt検定の結果

接触に対する満足感	男子			多重比較 の結果	女子			多重比較 の結果
	<大満足>群	<満足>群	<無関心>群		<大満足>群	<満足>群	<無関心>群	
幼少期の母親への	n=40	n=65	n=39		n=68	n=62	n=14	
<接触不快>得点	7.98(3.40)	10.14(3.39)	11.80(3.79)		5.90(1.86)	7.94(2.64)	9.71(4.83)	
F値(自由度)		11.85(2, 141)**		無>満>大		17.43(2, 141)**		無>満>大
<接触快>得点	23.50(6.47)	21.74(5.85)	18.33(5.03)		28.87(5.23)	24.98(4.43)	21.93(4.09)	
F値(自由度)		8.10(2, 141)**		大, 満>無		17.75(2, 141)**		大>満>無
<接触葛藤>得点	4.18(2.15)	4.82(1.66)	4.72(1.36)		4.43(1.70)	4.77(1.87)	3.64(1.22)	
F値(自由度)		1.78(2, 141)				2.53(2, 141)		
恋人に対する	n=36	n=57	n=34		n=55	n=50	n=13	
<接触快>得点	28.56(6.95)	28.81(4.19)	25.29(6.34)		31.62(4.91)	28.46(6.24)	27.16(8.58)	
F値(自由度)		4.52(2, 124)*		大, 満>無		4.81(2, 115)**		大>満, 無
<接触不快>得点	8.33(3.80)	9.05(4.25)	10.68(4.39)		6.86(2.83)	8.16(3.17)	10.39(6.63)	
F値(自由度)		2.93(2, 124)				5.65(2, 115)**		無, 満>大
<接触不安>得点	5.53(2.13)	5.18(2.38)	6.53(1.86)		3.60(1.45)	4.58(2.07)	4.85(2.58)	
F値(自由度)		4.17(2, 124)**		無>満		4.59(2, 115)*		満>大
内的ワーキング・モデルの	n=40	n=65	n=39		n=68	n=62	n=14	
<安定>得点	10.67(2.97)	10.88(3.12)	10.03(2.58)		11.52(3.01)	10.53(3.25)	10.57(2.50)	
F値(自由度)		1.31(2, 141)				1.81(2, 141)		
<アンビバント>得点	17.55(4.11)	17.82(4.37)	17.95(4.64)		17.43(4.67)	18.86(4.60)	18.21(5.04)	
F値(自由度)		0.09(2, 141)				1.52(2, 141)		
<回避>得点	14.55(3.46)	15.99(3.74)	16.46(3.87)		14.60(4.10)	15.44(3.82)	16.79(4.26)	
F値(自由度)		2.94(2, 141)				1.97(2, 141)		

注1)各得点の横の ( ) は標準偏差を示す

\*\*p<.01, \*p<.05

注2)多重比較はBonferroni方法による

## 10, 母親との身体接触の頻度に対する認識と満足感の関連

上記8の手続きにより群分けした、幼少期の母親との身体接触の頻度に対する認識2群と、上記9の手続きによって群分けした、幼少期における母親との身体接触に対する満足感3群との関連を見る(表27,表28)ために、男女それぞれに対して $\chi^2$ 検定を行った。

その結果、男女ともに、幼少期の母親との身体接触の頻度に対する認識と満足感との間に、有意な関連が見られた(男子 $\chi^2(2)=12.93$ 、女子 $\chi^2(2)$ )

表27 母親との身体接触の頻度に対する認識と満足感とのクロス表(男子)

男子	大満足群	満足群	無関心群	合計(%)
認識高群	33( 35.1)	47( 50.0)	14( 14.9)	94(100.0)
認識低群	5( 16.1)	12( 38.7)	14( 45.2)	31(100.0)
合計	38( 30.4)	59( 47.2)	28( 22.4)	125(100.0)

表28 母親との身体接触の頻度に対する認識と満足感とのクロス表(女子)

女子	大満足群	満足群	無関心群	合計(%)
認識高群	63( 54.3)	49( 42.2)	4( 3.4)	116(100.0)
認識低群	4( 16.7)	12( 50.0)	8( 33.3)	24(100.0)
合計	67( 47.9)	61( 43.6)	12( 8.6)	140(100.0)

=26.88いずれも $p < .01$  )。

## 考察

本調査の目的は、男女別に、幼少期の母親との身体接触場面における感情傾向と恋人との身体接触場面における感情傾向の関連、また、恋人との身体接触場面における感情傾向と内的ワーキング・モデルの関連について検討することであった。

幼少期の母親との身体接触場面における感情傾向の因子は、男女ともに、母親との身体接触に不快を感じる<接触不快>因子、母親との身体接触から快を得られる<接触快>因子、母親と身体的ふれあいを求める一方で不安を感じる<接触葛藤>因子の3つであった。一方、恋人との身体接触場面における感情傾向の因子は、男女ともに、恋人との身体接触から快を得られる<接触快>因子、恋人との身体接触に不快を感じる<接触不快>因子、恋人との身体接触に不安を抱いている<接触不安>因子の3つであった。なお、母親に対する<接触葛藤>因子と恋人に対する<接触不安>因

子の違いは、＜接触葛藤＞因子が、身体接触を求めながらも不安を感じるというアンビバレントな感情であったのに対して、＜接触不安＞因子は、身体接触に対して不安のみを抱いていた点であった。母親に対する＜接触葛藤＞因子に含まれていた「私は、Aさんがしてくれていた以上に体のふれあいを求めている」という項目は、恋人に対する接触感情傾向の因子分析の結果では＜接触快＞因子へ移動しており、これは、恋人への身体接触に対する要求が快感情と結びついているのに対して、母親への身体接触に対する要求は、快感情とは別の次元で生まれていることを示唆しているといえよう。これより、子どもにとって母親との身体接触は、快が得られる得られないに関わりなく、本能的に寄り添っていたいという感情を呼び起こすものであると解釈することができ、一方、恋人との身体接触は、快が得られるからこそ接触をさらに求めていくのだと解釈できる。本研究では、主要人物として一まとめにした母親と恋人であったが、身体接触時の感情は、その対象によって部分的に異なっていることを理解する必要があるだろう。

幼少期の母親との身体接触場面における感情傾向と恋人との身体接触場面における感情傾向の関連については、たとえば、幼少期に母親との身体接触を快と感じていればいるほど、恋人との身体接触についても快と感じる傾向が弱いながらも見られたように、接触対象や時期の違いを越えて、それらの感情には結びつきのあることが示された。男子においては、不快感情において特にその結びつきが強く、また、幼少期の母親との身体接触場面において葛藤感情が強ければ強いほど、恋人との身体接触を不快、または不安と感じる傾向が弱いながらも見られたことから推論するならば、幼少期に母親という1人の女性との間で経験してきた身体接触を、青年期に、恋人という別の女性に対して重ね合わせてしまうからではないかと考えられる。この点について考察をより深めるには、異性の親子間における身体接触経験が、後に、子どもの恋人に対する身体接触場面での感情傾向に影響を及ぼすかどうかについて調べる必要がある。たとえば、父親と子

の愛着が強いと思われる父子家庭で育った女子青年を対象に、幼少期の父親との身体接触場面における感情傾向と恋人との身体接触場面における感情傾向の関連を調べ、本調査と比較することが望まれるであろう。

次に、恋人に対する接触感情と内的ワーキング・モデルとの関係においては、回避傾向の高い愛着を示す者ほど恋人との身体接触を不快だと感じる傾向が、またアンビバレント傾向の高い愛着を示す者ほど恋人に対する身体接触に不安を感じる傾向が、それぞれ男子において特に見られた。この結果から、恋人に対する接触感情と内的ワーキング・モデルとの間に、部分的ではあるが関連があったということができよう。

これについては、阿部(1998)がセックスレス・カップルの中で特に問題だとしている「性的回避群」と関連して考えていきたい。阿部のクリニックを訪れるセックスレス・カップルの中で、問題の源が性機能でなく男性側の性格にあるとされている性的回避群は、回避型人格障害と診断される。これは、恐怖症で対人緊張が強く、情緒的交流や親密さを作り上げることが困難な性格傾向のことであり、その基底には、自己評価の低さと成功不安が存在すると考えられている。「パートナーを抱きたい」、「親密になりたい」と願いながらも、「嫌われるのではないか」という低い自己評価や「これ以上幸せになったら恐ろしい」という成功不安が、相手と親しくなることへの不安を生み出す。阿部は、このような人々が、もっとも親密感を必要とする性行為を回避することは当然だとしている。この性的回避群の男性には共通点がいくつかあるが、その中でも生まれ育った家庭環境に関しては、①時間を決めた人工栄養保育②冷たく無機質な家庭的雰囲気③母親からの過干渉と抑制的なしつけなどがあげられており、これらを見る限りでは、母子間の身体接触が必要以上にはあまりなされていなかったということができよう。しかし、現段階において母子間での身体接触経験と回避型人格障害との直接的な因果関係は確認されておらず、また、本調査において、回避傾向の高い愛着を示す人ほど恋人との身体接触を不快だと感じる傾向が見られたといえども、内的ワーキング・モデルの回避傾

向と回避型人格障害との関連について言及した先行研究が見あたらないため、今後この点については、臨床研究側からのアプローチが望まれるところである。また反対に、内的ワーキング・モデルのアンビバレント傾向および回避傾向の高い愛着を示す者の中で、接触不快感情もしくは接触不安感情が強い場合に、セックスレスになる傾向があるのかどうかについて調査を進めることも意義深いであろう。

なお、これまでの記述からもわかるように、身体接触に対する意識は性において異なっている。接触不安感情については男子のほうが、接触快感については女子のほうが抱きやすい傾向が見られた。また、母親との身体接触に対する頻度の認識や満足感についても、ともに男子と比べて女子の認識や満足感のほうが高く、反対に「思い出せない」や「何も思わない」といった項目を選んでいたのは男子のほうが多かった。

結果にあらわれたこれらの性差は、おそらく他者との身体接触経験の頻度差から生じたものであろう。身体接触に関する調査を行ったJourard(1966)や鈴木・春木(1989)は、女子が男子に比べて、母親や同性・異性の友人からよくさわられる傾向があることを報告している。また、愛着研究において戸田・松井(1985)は、母親、親友、恋人に対する愛着が、すべて男子より女子のほうが強いことを報告した。つまり、これらの調査結果より、男子においては、養育者をはじめとする他者との身体接触経験が女子と比べて少ないために、接触行為そのものへの抵抗感が生まれやすく、不快や不安の感情を抱きやすいのではないかと推測される。しかし、男女双方に対していえることは、母親との身体接触の頻度が多いという認識を持っている者ほど、それに対して満足感を得られていた点である。抱っこを嫌がる赤ちゃん(中日新聞, 1999)や、身体接触への要求を満たさきれていない子どもたち(山陽新聞, 2000)の存在が伝えられているが、子どもたちに、接触に対する拒絶感や不安感を植え付けさせたり、身体接触への要求が満たされないことへの不満感を抱かせないためにも、母親は、子どもが求めてくる身体接触に対して敏感に応えるよう努める必要があるであろう。



## 総合考察

本研究では、①幼少期の母親との身体接触場面における感情傾向と現在の母親との身体接触場面における感情傾向との関連、②幼少期の母親との身体接触場面における感情傾向と現在および過去の恋人との身体接触場面における感情傾向との関連③現在の母親または恋人との身体接触場面における感情傾向と内的ワーキング・モデルとの関連、④母親との身体接触に対する頻度の認識と満足感との関連について調査した。ここでは、本研究の主題となっている、現在の母親または恋人との身体接触場面における感情傾向と内的ワーキング・モデルとの関連、および、その性差について考察していく。

調査1では、Touching Emotion Scale (TES) を作成し、大学生女子を対象に、現在の母親との身体接触場面における感情傾向と内的ワーキング・モデルとの関連を検討した。はじめに、TESを因子分析した結果、行動レベルにおいては「さわる」、「さわらない」という単純構造の身体接触が、感情レベルにおいては、母親との身体接触から快を得られる〈接触快〉因子、母親との身体接触に不快を感じる〈接触不快〉因子、母親との身体的ふれあいを求める一方で不安を感じる〈接触葛藤〉因子の3因子からなる構造であることがわかった。次に、内的ワーキング・モデルとの関連を調べたところ、回避傾向の高い愛着を示す者は、母親との身体接触を不快あるいは葛藤を感じるものとして受け止める傾向が見られ、一方、安定傾向の高い愛着を示す者にとっては、母親との身体接触への葛藤が低い傾向が見られた。

調査2では、大学生を対象に男女別で、恋人との身体接触場面における感情傾向と内的ワーキング・モデルとの関連を検討した。はじめに、TESを因子分析した結果、恋人との身体接触から快を得られる〈接触快〉因子、恋人との身体接触に不快を感じる〈接触不快〉因子、恋人との身体接触に不安を感じる〈接触不安〉因子の3因子からなる構造であることがわかつ

た。次に、内的ワーキング・モデルとの関連を調べたところ、男女ともに回避傾向の高い愛着を示す者は、恋人との身体接触を不快だと感じる傾向が見られ、また、恋人との身体接触からは快を得られていないといった傾向が見られた。また、アンビバレント傾向の高い愛着を示す者は、同じく男女ともに、恋人との身体接触について不安を感じやすい傾向が見られた。

調査1および2より、対人関係のあり方に影響を与えるとされている内的ワーキング・モデルが、主要人物との身体接触という一行動場面においても、感情面で部分的に影響を与えていることがわかった。両調査において共通に見られた結果は、身体接触場面での不快感情と内的ワーキング・モデルの回避傾向との関連についてである。たとえば、母子間の密接な身体接触による相互作用について調べた研究では、Strange Situation Procedure において回避群に分けられた乳児の母親たちが、安定群やアンビバレント群に分けられた乳児の母親たちに比べ、子どもたちとの身体接触に嫌悪を示し、子どもに対してより拒否的であり、怒りを示すことが多く、愛情をほとんど表現しなかったことが報告されている (Ainsworth, 1981)。親の内的ワーキング・モデルが、世代間伝達をして、子の愛着に影響を与えている傾向がある (数井, 遠藤, 田中, 坂上, 菅沼; 2000) ことを、この研究結果に当てはめて考えるならば、回避群に分けられた乳児の母親は、回避傾向の高い愛着スタイルを持っていた可能性があるかと推測できる。これは、身体接触に対する嫌悪感情と内的ワーキング・モデルの回避傾向との関連を裏付ける1つといえるであろう。

本研究からは、身体接触場面での不快感情と内的ワーキング・モデルの回避傾向の因果関係について特定することはできないが、少なくともそれらの背景には、他者と親密になることを回避している様子が想像される。身体接触とは、原始的なコミュニケーション方法であり、「さわる」という行動が相手の領域を直接的に侵すため、二者間に信頼関係ができあがっていない場合、相手に攻撃的行動として受け取られる可能性もある。不安定な愛着スタイルをとる回避傾向の高い者にとって、身体接触行動が自分

の領域を侵すものとして受け取られているのならば、それに対して拒否あるいは不快感を抱くことは当然であろう。

なお、母親との身体接触場面における感情傾向と内的ワーキング・モデルとの関連、および、恋人との身体接触場面における感情傾向と内的ワーキング・モデルとの関連の両者を、2つの調査の女子のみで比較したところ、身体接触場面における感情傾向と内的ワーキング・モデルとの関連が多く見られたのは、母親よりも恋人との間であった。これに対する1つの解釈として、青年期には、重要な愛着対象が、それまでの母親から恋人へと移行することに関係しているといえるのではないだろうか。この点については、男子に対して調査を行い、改めて考察を深める必要があるだろう。

次に、身体接触場面での感情傾向と内的ワーキング・モデルとの関連において見られた性差について考察する。調査2においては、男女それぞれに、恋人との身体接触場面における感情傾向と内的ワーキング・モデルとの関連を調べた。その結果、男子においては、恋人に対する<接触快>因子と内的ワーキング・モデルの<安定>因子との間に弱い正の相関が見られたが、女子についてはそれが見られなかった。また、男子においては、恋人に対する<接触不安>因子と内的ワーキング・モデルの<安定>因子との間に中程度の負の相関が見られたが、女子についてはそれが見られなかった。一方、女子においては、恋人に対する<接触不快>因子と内的ワーキング・モデルの<アンビバレント>因子との間に弱い正の相関が見られたが、男子についてはそれが見られなかった。現段階において、この性差があらわしていることを裏付けできるものはないが、1つの解釈としては、身体接触行動に対する男女の受け取り方の違いをあげることができるのではないだろうか。質問紙への回答時に、「身体接触」という言葉に対して性的イメージを強く抱いていたか、あるいは日常レベルでの身体接触を想定していたかによって、回答の傾向も異なってくると思われる。しかし、たとえば、恋人関係や夫婦関係において「抱きしめてほしい」という相手への要求は、性動因を満足させる要求であると同時に、相手からの保護を

求めたり、相手を養護したいといったアタッチメント動因を満足させる要求でもある(戸田, 1998)ため、恋人間の身体接触に対して質問をする際に、両者を厳密に分けて取り扱うことは不可能である。本研究においてあらわれた性差を明らかにするために、まずは「恋人との身体接触」という言葉の受け取り方について、男女別に細かく調査していく必要があるだろう。

## 引用文献

- Ainsworth, M. D. S. 依田明(監訳) 1981 アタッチメント：情緒と対人関係の発達(pp. 7-27) 金子書房.
- 阿部輝夫 1998 増え続けるセックスレス・カップル 看護, 50(8), 151-159.
- Bowlby, J. 1969 Attachment and Loss : Vol.1. Attachment. London :The Hogarth Press. (黒田実郎・大羽葵・岡田洋子・黒田聖一訳 母子関係の理論Ⅰ：愛着行動 岩崎学術出版社 1976)
- Bowlby, J. 1973 Attachment and Loss : Vol.2. Separation:Anxiety and Anger. London:The Hogarth Press. (黒田実郎・岡田洋子・吉田恒子訳 母子関係の理論Ⅱ：分離不安 岩崎学術出版社1977)
- Bowlby, J. 1980 Attachment and Loss : Vol.3. Loss:Sadness and Depression. London:The Hogarth Press. (黒田実郎・吉田恒子・横浜恵三子訳 母子関係の理論Ⅲ：対象喪失 岩崎学術出版社 1981)
- デラシュー, J.M. 永島章雄 2001 母子関係障害という“病気” 赤ちゃんの顔を見ない母親 光文社.
- 遠藤利彦 1992 愛着と表象－愛着研究の最近の動向：内的作業モデル概念とそれをめぐる実証研究の概観－ 心理学評論, 35(2), 201-233.
- Grandin, T. 1992 Calming effects of deep touch pressure in patients with autistic disorder, college students, and animals. Journal of Child and Adolescent Psychopharmacology, 2 (1), 63-72.
- 繁多進 1987 愛着の発達 大日本図書.
- Harlow, H. F. 1958 The nature of love. American Psychologist, 13, 673-685.
- Hazan, C., & Shaver, P. 1987 Romantic love conceptualized as an attachment process. Journal of Personality and Social Psychology, 52, 511-524.

- 畠中智代 土蔵愛子 1998 聖隷浜松病院における看護婦のタッチについての意識調査 看護展望, 23(1), 72-79.
- 林道義 1999 母性崩壊 PHP研究所.
- Holroyd, J., & Brodsky, A. 1980 Does touching patients lead to sexual intercourse? Professional Psychology, 11, 907-911.
- 数井みゆき 遠藤利彦 田中亜希子 坂上裕子 菅沼真樹 2000 日本人母子における愛着の世代間伝達 教育心理学研究, 48, 323-332.
- Knapp, M. L. 1972 Nonverbal communication in human interaction. Holt, Rinehart & Winston, Inc. (牧野成一・牧野泰子訳 人間関係における非言語情報伝達 東海大学出版会 1979)
- 今野義孝 1999 発達心理臨床におけるタッチの意義 文教大学教育学部紀要, 33, 37-47.
- 石崎裕子 2000 現代日本社会における親密性の変容－「セックスレス・カップル」をめぐる雑誌記事の分析を中心に－ 日本女子大学大学院人間社会研究科紀要, 6, 113-124.
- Jourard, S. M. 1966 An Exploratory Study of Body-Accessibility. British Journal of Social and Clinical psychology, 521-332.
- 小高恵 1998 青年期後期における青年の親への態度・行動についての因子分析的研究 教育心理学研究, 46, 333-342.
- 森千鶴 村松仁 永澤悦伸 福澤等 2000 タッチングによる精神・生理機能の変化 山梨医科大学紀要, 17, 64-67.
- 森下利子 池田由紀 長尾淳子 2000 意図的タッチによる心身への影響に関する研究－POMSの「緊張－不安」スコアによる対象群別比較－ 三重県立看護大学紀要, 4, 9-14.
- Montagu, A. 1971 Touching : The Human Significance of the Skin. Columbia University Press. (佐藤信行・佐藤方代訳 タッチング 親と子のふれあい 平凡社 1977)
- Morris, D. 1971 Intimate behaviour. Jonathan Cape Ltd. (石川弘義

- 訳 ふれあい 愛のコミュニケーション 平凡社 1993)
- 武藤安子 1988 母子関係の発達における触経験の意義 感覚統合研究5, 11-23.
- 山陽新聞 2000 甘えたい・甘えられない - おんぶして。オレも子どもじやから- (3月6日付)
- 落合良行 佐藤有耕 1996 親子関係の変化からみた心理的離乳への過程の分析 教育心理学研究, 44, 11-22.
- 鈴木昌夫 春木豊 1989 対人接触に関する試験的研究 早稲田心理学年報, 21, 93-98.
- 竹内美香 鈴木昌夫 2000 親の養育態度と幼児接触経験 産能短期大学紀要, 34, 171-184.
- 詫摩武俊 戸田弘二 1988 愛着理論からみた青年の対人態度 - 成人版愛着スタイル尺度作成の試み - 東京都立大学人文学報, 196, 1-16.
- 戸田弘二 松井豊 1985 大学生の愛着構造と異性交際 心理学研究56(5) 288-291.
- 戸田弘二 1988 青年期後期における基本的対人態度と愛着スタイル: 作業仮説 (working models) からの検討 日本心理学会第52回大会発表論文集, 27.
- 戸田弘二 1991 Internal Working Models 研究の展望 北海道大学教育学部紀要, 55, 133-143.
- 戸田弘二 1998 アタッチメント理論から見た恋愛 現代のエスプリ, 368, 184-197.
- 土蔵愛子 2001 タッチ (Touch) に関する研究と実践の動向からみた今後の研究課題 臨床看護研究の進歩, 12, 10-16.
- Tronick, E. Z. 1995 Touch in mother-infant interaction. In Field, T. M. (ed.) Touch in Early Development. Lawrence Erlbaum Associates, Publishers, Mahwah, New Jersey.
- 中日新聞 1999 抱っこイヤイヤ 赤ちゃんに異変 (10月25日付)

- 山岸明子 2000 女子青年によって再構成された幼少期から現在にかけての母親との関係 青年心理学研究, 12, 31-46.
- 山口創 春木豊 1998 身体接触が気分にあげぼす影響—身体心理学の研究XXV—日本心理学会第62回大会発表論文集, 1039.
- 山口創 山本晴義 春木豊 2000 両親から受けた身体接触と心理的不適応との関連 健康心理学研究, 13(2), 19-28.



## 謝辞

本論文の作成にあたり、データ集めにおいて快くお力を貸して下さった愛知学院大学文学部心理学科の酒井良爾先生に心より感謝いたします。また、データの入力ミス探しを手伝って下さった庄司泰造さん、大西理恵さん、田村真琴さんに改めて感謝いたします。そして、何より、この研究を可能にしてくださった調査協力者の皆様に心よりお礼申し上げます。

最後に、理解の遅い私の性格にあわせて、ゆっくり、しかし着実にここまで成長させて下さった横川和章先生に、心より深く感謝いたします。ありがとうございました。

2001, 12, 20

酒井 由紀

# 資 料

(質問紙)

Touching Emotion scale

Touching Emotion scale version2

調査協力をお願い

本調査では『対人関係における身体接触と感情傾向』について調べています。今から答えていただく質問には、正しい答えや誤った答えなどというものはありませんので、あなたが感じたまま率直に回答してください。また、調査結果をこの研究以外に使用することはありません。回答が外部に漏れるということもありませんので、安心してご記入ください。

【回答例】

	非常にあてはまる	かなりあてはまる	どちらかというとあてはまる	どちらかというとあてはまらない	あてはまらない ほとんど	全くあてはまらない
1, 私は、犬が好きである。.....	6	5	4	3	2	1

性別 男 ・ 女

学年 ( ) 年生

年齢 ( ) 歳

住居の形態 一人暮らし ・ 親元暮らし ・ その他 ( )

あなたの幼児期および小学校時代についてお聞きします。以下の質問について自分の気持ちに最も近い番号を○で囲んでください。なお本文中の「Aさん」とは、あなたが生まれてから中学校に上がるまでの間で、あなたの体にさわる回数をもっとも多かった養育者（たとえば母親、父親）を示すものとします。

あなたにとって、Aさんはだれですか？

- ① 母親      ② 父親      ③その他（    ）

	非常にあてはまる	かなりあてはまる	どちらかというど あてはまる	どちらかというど あてはまらない	ほとんど あてはまらない	全くあてはまらない
1, 私は不安で仕方ない時、Aさんをさわることで安心感を得ていた。…… 6	5	4	3	2	1	
2, Aさんの体にさわることは、私にとってたやすいことであった。…… 6	5	4	3	2	1	
3, 私は、AさんにさわることによってAさんの感情を損わせてしまうのではないか、という不安を感じることもあった。…… 6	5	4	3	2	1	
4, 私は、Aさんとふれあっている時うれしかった。…… 6	5	4	3	2	1	
5, 私は、Aさんと距離を置いてふれあわずにいる方が心地よかった。…… 6	5	4	3	2	1	
6, 私は、Aさんが怒っていても、Aさんの体をさわることに不安はなかった。…… 6	5	4	3	2	1	
7, 私は、Aさんが私にさわられることを望んでいないのではないかと感じることもあった。…… 6	5	4	3	2	1	
8, 私は、Aさんがしてくれた以上に体のふれあいを求めていた。…… 6	5	4	3	2	1	
9, 私は、Aさんの体にさわりたいくなかった。…… 6	5	4	3	2	1	
10, 私は、Aさんの体にさわれることを心地よく感じていた。…… 6	5	4	3	2	1	
11, 私は、Aさんがあまりに私の体にさわってくるのでいやだった。…… 6	5	4	3	2	1	
12, 私は、Aさんが私の体をさすってくれる時リラックスしていた。…… 6	5	4	3	2	1	
13, 私にとって、Aさんからのスキンシップはうれしかった。…… 6	5	4	3	2	1	
14, 私はAさんからさわられる時、恐怖を感じていた。…… 6	5	4	3	2	1	

	非常にあてはまる	かなりあてはまる	どちらかというところ あてはまる	あてはまらない どちらかというところ	あてはまらない ほとんど	全くあてはまらない
15,私は、Aさんがいやいや私の体にさわっているのではないかと 思うことがあった。……………	6	5	4	3	2	1
16,たとえAさんでも、私は自分の体にさわられると嫌悪感を抱いていた。	6	5	4	3	2	1
17,私は不安で仕方ない時、Aさんに抱きしめられると安心した。……………	6	5	4	3	2	1
18,私にとって、Aさんからさわられることは不幸なことであった。……………	6	5	4	3	2	1
19,Aさんから一方的に抱きしめられると、不安を感じることもあった。…	6	5	4	3	2	1
20,私は、Aさんからさわられることに心地よさを感じていた。……………	6	5	4	3	2	1

あなた自身、どの程度Aさんから体をさわって育てられたと感じていますか。以下の中で、自分の気持ちに最も近い番号を○で囲んでください。

- ①よくさわられた
- ②まあまあさわられた
- ③あまりさわられなかった
- ④全然さわられなかった
- ⑤思い出せない

あなた自身、上記のようにAさんから育てられたことを現在どのように感じていますか。以下の中で、自分の気持ちに最も近い番号を○で囲んでください。

- ①とても満足している
- ②まあまあ満足している
- ③もう少しさわってほしかった
- ④もっとさわってほしかった
- ⑤さわられなくなかった

現在のあなたについてお聞きします。以下の質問について自分の気持ちに最も近い番号を○で囲んでください。なお本文中の「Aさん」とは、あなたが先の質問で設定した人物と同一であることを示しています。

	非常にあてはまる	かなりあてはまる	どちらかというとあてはまる	どちらかというにあてはまらない	ほとんどあてはまらない	全くあてはまらない
1, 不安で仕方ない時、Aさんにふれることで安心感を得られると思う。…	6	5	4	3	2	1
2, Aさんの体にさわるとは、私にとってたやすいことである。……	6	5	4	3	2	1
3, 私は、AさんにさわることによってAさんの感情を損わせてしまうのではないかと、という不安を感じることもある。……	6	5	4	3	2	1
4, どうしようもなく辛い時、小さな子どもみたくAさんに抱きつくことができたならば、気持ちが落ち着くと思う。……	6	5	4	3	2	1
5, 私は、Aさんとの間に距離を置いてふれあわずにいる方が心地よい。……	6	5	4	3	2	1
6, 私は、Aさんが怒っていても、Aさんの体をさわることには不安はない。…	6	5	4	3	2	1
7, 私は、Aさんが私にさわられることを望んでいないのではないかと感じることもある。……	6	5	4	3	2	1
8, 心の中では、今以上に体のふれあいを求めている。……	6	5	4	3	2	1
9, 私は、Aさんの体にさわりたいくない。……	6	5	4	3	2	1
10, 用があってAさんのからだにさわるといような場合でも、私がAさんのことを嫌いならばできないと思う。……	6	5	4	3	2	1
11, 私は、Aさんがあまりに私の体にさわってくるのでいやだ。……	6	5	4	3	2	1
12, もしAさんが私の体をマッサージしてくれるならば、その時私はリラックスできると思う。……	6	5	4	3	2	1
13, 私にとって、Aさんからのスキンシップはいやなものではない。……	6	5	4	3	2	1
14, 私はAさんからさわられる時、恐怖を感じていることがある。……	6	5	4	3	2	1
15, 私は、Aさんがいやいや私の体にさわっているのではないかと、思うことがある。……	6	5	4	3	2	1

	非常にあてはまる	かなりあてはまる	どちらかというところ あてはまる	あてはまらない どちらかというところ	あてはまらない ほとんど	全くあてはまらない
16,たとえAさんであっても、私は自分の体にさわられると嫌悪感を抱く。 6	5	4	3	2	1	
17,不安で仕方ない時、Aさんが私の背中に手を置いてくれると安心 できると思う。…………… 6	5	4	3	2	1	
18,私にとって、Aさんからさわられることは不幸なことである。…………… 6	5	4	3	2	1	
19,私は、予期せぬ時にAさんから体にふれられると、不安を感じる ことがある。…………… 6	5	4	3	2	1	
20,私は、Aさんが私の体にさわることについて、根本的には私のことが 好きだからこそできるのだと思う。…………… 6	5	4	3	2	1	

以下の質問は、一般的な対人関係に関する内容のものです。自分の気持ちに最も近い番号を○で囲んでください。

	非常にあてはまる	かなりあてはまる	どちらかというところ あてはまる	あてはまらない どちらかというところ	あてはまらない ほとんど	全くあてはまらない
1,私は知り合いができやすい方だ。…………… 6	5	4	3	2	1	
2,人は本当はいやいやながら私と親しくしてくれているのではないか と思うことがある。…………… 6	5	4	3	2	1	
3,人に頼るのは好きでない。…………… 6	5	4	3	2	1	
4,ときどき友達が、本当は私を好いてくれているのではないかとか、 私と一緒にいたくないのではと心配になることがある。…………… 6	5	4	3	2	1	
5,私はすぐに人と親しくなる方だ。…………… 6	5	4	3	2	1	
6,私は人に頼らなくても、自分一人で充分にうまくやって行けると思う。… 6	5	4	3	2	1	
7,私は人に好かれやすい性質だと思う。…………… 6	5	4	3	2	1	

	非常にあてはまる	かなりあてはまる	どちらかというど あてはまる	あてはまらない どちらかというど	あてはまらない ほとんど	全くあてはまらない
8, 自分を信用できないことが良くある。……………	6	5	4	3	2	1
9, あまりにも親しくされたり、こちらが望む以上に親しくなることを 求められたりすると、イライラしてしまう。……………	6	5	4	3	2	1
10, たいていの人私のことを好いてくれていると思う。……………	6	5	4	3	2	1
11, あまり自分に自信が持てない方だ。……………	6	5	4	3	2	1
12, あまり人と親しくなるのは好きでない。……………	6	5	4	3	2	1
13, 気軽に頼ったり頼られたりすることができる。……………	6	5	4	3	2	1
14, ちょっとしたこと、すぐに自信をなくしてしまう。……………	6	5	4	3	2	1
15, 人は全面的には信用できないと思う。……………	6	5	4	3	2	1
16, どんなに親しい間柄であろうと、あまりなれなれしい態度をとられると 嫌になってしまう。……………	6	5	4	3	2	1
17, 私はいつも人と一緒にいたがるので、ときどき人から疎まれてしまう。…	6	5	4	3	2	1
18, 初めて会った人とでもうまくやっていける自信がある。……………	6	5	4	3	2	1

ご協力ありがとうございました

★本調査に関する感想、意見などございましたら、以下にご記入ください。



調査協力をお願い

本調査では『対人関係における身体接触と感情傾向』について調べています。今から答えていただく質問には、正しい答えや誤った答えなどというものはありませんので、あなたが感じたまま率直に回答してください。また、調査結果をこの研究以外に使用することはありません。回答が外部に漏れるということもありませんので、安心してご記入ください。ご協力お願いします。

兵庫教育大学大学院 学校教育研究科 酒井由紀

【回答例】

	非常にあてはまる	かなりあてはまる	どちらかというとあてはまる	どちらかというとあてはまらない	ほとんどあてはまらない	全くあてはまらない
1, 私は、犬が好きである。……………	6	5	4	3	2	1

● 質問紙に入る前に、以下のことについてお答えください。

性別 男 ・ 女

年齢 ( ) 歳

住居の形態 一人暮らし ・ 親元暮らし ・ その他 ( )

**あなたの幼児期および小学校時代**についてお聞きします。以下の質問について当時のあなたの気持ちに最も近い番号を○で囲んでください。「Aさん」とは、あなたが生まれてから中学校に上がるまでの間で、あなたの体にさわる回数をもっとも多かった養育者(たとえば母親、父親)を示すものとします。なお文中の「さわる」「ふれる」には、性的な意味は一切含まれていないものとします。

あなたにとって、Aさんはだれですか？

- ① 母親      ② 父親      ③ その他 (                      )

全くあてはまらない  
 あてはまらない  
 ほとんど  
 あてはまらない  
 どちらかというと  
 あてはまる  
 どちらかというと  
 かなりあてはまる  
 非常にあてはまる

- 1,私は、不安で仕方なかった時、Aさんにふれることで安心感を得られていたと思う。…………… 6 - 5 - 4 - 3 - 2 - 1
- 2,私は、AさんにさわることによってAさんの感情を損わせてしまうのではないかと、という不安を感じていた。…………… 6 - 5 - 4 - 3 - 2 - 1
- 3,私は、Aさんとふれあっている時うれしかった。…………… 6 - 5 - 4 - 3 - 2 - 1
- 4,私は、Aさんの体にさわらなくなかった。…………… 6 - 5 - 4 - 3 - 2 - 1
- 5,私は、Aさんがしてくれていた以上に体のふれあいを求めていた。…………… 6 - 5 - 4 - 3 - 2 - 1
- 6,私は、Aさんが私にさわられることを望んでいないのではないかと感じていた。…………… 6 - 5 - 4 - 3 - 2 - 1
- 7,私は、Aさんの体にさわれることを心地よく感じていた。…………… 6 - 5 - 4 - 3 - 2 - 1
- 8,私は、Aさんがあまりに私の体にさわってくるのでいやだった。…………… 6 - 5 - 4 - 3 - 2 - 1
- 9,私は、Aさんが私の体をさすってくればリラックスすることができた。…………… 6 - 5 - 4 - 3 - 2 - 1
- 10,私はAさんからさわられる時、恐怖を感じていた。…………… 6 - 5 - 4 - 3 - 2 - 1
- 11,私は、Aさんがいやいや私の体にさわっているのではないかと感じていた。…………… 6 - 5 - 4 - 3 - 2 - 1
- 12,たとえAさんでも、私は自分の体にさわられると嫌悪感を抱いていた。…………… 6 - 5 - 4 - 3 - 2 - 1
- 13,不安で仕方ない時、Aさんが背中に手を置いてくれれば安心したと思う。…………… 6 - 5 - 4 - 3 - 2 - 1
- 14,私にとって、Aさんからさわられることは不幸なことであった。…………… 6 - 5 - 4 - 3 - 2 - 1  
 Aさんから一方的にさわられると、不安を感じていたと思う。…………… 6 - 5 - 4 - 3 - 2 - 1
- 16,私は、Aさんからさわられることに心地よさを感じていた。…………… 6 - 5 - 4 - 3 - 2 - 1

あなた自身、Aさんからどの程度からだをさわって育てられたと現在感じていますか。  
以下の中で、あなたの気持ちに最も近い番号を○で囲んでください。

- ①よくさわられた
- ②まあまあさわられた
- ③あまりさわられなかった
- ④全然さわられなかった
- ⑤思い出せない

あなた自身、上記のようにAさんから育てられたことを現在どのように感じていますか。  
以下の中で、あなたの気持ちに最も近い番号を○で囲んでください。

- ①とても満足している
- ②まあまあ満足している
- ③もう少しさわってほしかった
- ④もっとさわってほしかった
- ⑤さわられなくなかった
- ⑥何も思わない

**現在のあなた**についてお聞きします。次ページの質問についてあなたの気持ちに最も近い番号を○で囲んでください。文中の「Bさん」とは現在の恋人を示すものとします。また、今は恋人がいないが過去にはいた、という人は過去の恋人をひとり想定して答えてください。なお、これまでに恋人がいなかった人は、先の質問のAさんを当てはめて答えてください。

あなたにとって、Bさんはだれですか？当てはまるものに○をつけてください。

- ①現在の恋人
- ②過去(       歳のとき)の恋人 →交際当時を思い出した上で、次ページの質問にお答えください
- ③養育者(Aさん)

	非常にあてはまる	かなりあてはまる	どちらかというとあてはまる	どちらかというとあてはまらない	ほとんどあてはまらない	全くあてはまらない
1,不安で仕方ない時、Bさんにふれることで安心感を得られる（得られていた）。……………	6	5	4	3	2	1
2,私は、BさんにさわることによってBさんの感情を損わせてしまうのではないか、という不安を感じる（感じていた）。……………	6	5	4	3	2	1
3,私はBさんとふれあっている時、喜びを感じる（感じていた）。……………	6	5	4	3	2	1
4,私は、Bさんの体にさわりたい（さわらなかつた）。……………	6	5	4	3	2	1
5,私は心の中で、Bさんと今以上の身体的ふれあいを求めている（交際当時に求めていた）。……………	6	5	4	3	2	1
6,私は、Bさんが私にさわられることを望んでいないのではないかと感じる（感じていた）。……………	6	5	4	3	2	1
7,私は、Bさんの体にさわれることを心地よく感じる（心地よく感じていた）。……………	6	5	4	3	2	1
8,あまりにもBさんが私の体にさわってくるといやになる（いやだった）。……………	6	5	4	3	2	1
9,もしBさんが私の体をマッサージしてくれるならば、その時私はリラックスできると思う（リラックスしていたと思う）。……………	6	5	4	3	2	1
10,私はBさんからさわられる時、恐怖を感じている（感じていた）。……………	6	5	4	3	2	1
11,私は、Bさんがいやいや私の体にさわっているのではないかと感じる（感じていた）。……………	6	5	4	3	2	1
12,たとえBさんであっても、私は自分の体にさわられると嫌悪感を抱く（抱いていた）。……………	6	5	4	3	2	1
13,不安で仕方ない時、Bさんが私の背中に手を置いてくれると安心できると思う（安心できていたと思う）。……………	6	5	4	3	2	1
14,私にとって、Bさんからさわられることは不幸なことである（不幸なことであった）。……………	6	5	4	3	2	1
15,私はBさんから一方的にふれられると、不安を感じると思う（感じていたと思う）。……………	6	5	4	3	2	1
16,私は、Bさんからさわられることに心地よさを感じる（感じていた）。……………	6	5	4	3	2	1

以下の質問は、**一般的な対人関係**に関する内容のものです。現在のあなたの気持ちに最も近い番号を○で囲んでください。

	非常にあてはまる	かなりあてはまる	どちらかというとあてはまる	あてはまらない どちらかというとはほとんど	あてはまらない ほとんど	全くあてはまらない
1,私は知り合いがしやすい方だ。……………	6	5	4	3	2	1
2,人は本当はいやいやながら私と親しくしてくれているのではないかと思うことがある。……………	6	5	4	3	2	1
3,人に頼るのは好きでない。……………	6	5	4	3	2	1
4,ときどき友達が、本当は私を好いてくれているのではないかとか、私と一緒にいたくないのではと心配になることがある。……………	6	5	4	3	2	1
5,私はすぐに人と親しくなる方だ。……………	6	5	4	3	2	1
6,私は人に頼らなくても、自分一人で充分にうまくやって行けると思う。	6	5	4	3	2	1
7,私は人に好かれやすい性質だと思う。……………	6	5	4	3	2	1
8,自分を信用できないことがよくある。……………	6	5	4	3	2	1
9,あまりにも親しくされたり、こちらが望む以上に親しくなることを求められたりすると、イライラしてしまう。……………	6	5	4	3	2	1
10,たいいてい人は私のことを好いてくれていると思う。……………	6	5	4	3	2	1
11,あまり自分に自信が持てない方だ。……………	6	5	4	3	2	1
12,あまり人と親しくなるのは好きでない。……………	6	5	4	3	2	1
13,気軽に頼ったり頼られたりすることができる。……………	6	5	4	3	2	1
14,ちょっとしたことで、すぐに自信をなくしてしまう。……………	6	5	4	3	2	1
15,人は全面的には信用できないと思う。……………	6	5	4	3	2	1
16,どんなに親しい間柄であろうと、あまりなれなれしい態度をとられるといやになってしまう。……………	6	5	4	3	2	1
17,私はいつも人と一緒にいたがるので、ときどき人から疎まれてしまう。	6	5	4	3	2	1
18,初めて会った人とでもうまくやっていける自信がある。……………	6	5	4	3	2	1

回答後は記入漏れがないことをご確認ください  
ご協力ありがとうございました